

上海中国書局印行と清議報訳載の「人佳之奇遇」を比較して

——特にその名訳と誤植訂正—— 第二篇

許 勢 常 安

一

中国の晚清文学を知る上において、梁啓超は重要な存在であり、梁啓超の文学・思想を知る上において、清議報訳載の「佳人奇遇」は、かなり重要な資料の一つである。なぜならば、これは梁啓超が翻訳を試みた始まりであり、⁽¹⁾「中国に在りては、則ち政治小説の嚆矢なり」⁽²⁾であり、日中両国文学の関係においては、日本文学を中国に紹介した最初の作品であるからである。⁽³⁾その上、この中文訳「佳人之奇遇」は、梁啓超が全く日本語を知らなかった時点で訳し、しかもその訳が「實に立派な、原文以上ともいふべき名文になっている」⁽⁴⁾という評価があったので、私は先に「清議報登載の佳人奇遇について」⁽⁵⁾という題で二三論考を加えて来た。この度、東京都中央図書館実藤文庫所蔵の上海中国書局印行「佳人之奇遇」を写真撮影することができたので、この二本を比較して、より清議報訳載「佳人奇遇」を知ること努めたい。

上海中国書局印行（以下「上海本」と略称）「佳人之奇遇」の翻訳動機・時代背景・西洋的外来語等については、すでに第一篇において

清議報訳載（以下「梁訳本」と略称）「佳人奇遇」と比較しながら論考を加えたので、本論文では、私は以前梁訳本「佳人奇遇」に見られる名訳と誤植訂正⁽⁶⁾について列挙した資料に基づいて論考を進めて行きたい。

本論文での原著東海散士（柴四郎）著「佳人之奇遇」は、昭和五年六月十五日出版の春陽堂「明治大正文学全集第一巻」本を元にして、明治十八年十月廿八日—明治三十年十月十九日出版の博文堂本を参照にし、梁訳本「佳人奇遇」は、民国五十六年五月、成文出版社「清議報」影印本登載「佳人奇遇」を使用したことをお断わりしたい。

二

梁訳本は原著十六巻あるうち、十二巻のはじめ（第一七一頁）までを訳し、上海本は八巻（第一二五頁）までしか訳していない。いま、私が以前名訳と思われるとして挙げた梁訳本の個所に基づいて、上海本の訳文をも挙げて比較することしよう。

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
實に、天上の美人降て人間に在るかと疑ふ。 $\frac{7}{9}$ 上	散士、亦之が爲に感動容を動かす。 $\frac{12}{15}$ 上	夫れ香は薫を以て自ら焼け、翠は羽を以て自ら傷る。 $\frac{22}{21}$ 下	窓を開て之を見れば、貧民群を爲し、旅客の憐を乞ふ者なり。 $\frac{6}{37}$ 上	散士一尾を贏す。 $\frac{21}{42}$ 下	星を戴て出て月を見て歸り、冬夜孜孜、縫織の苦を積むも、 $\frac{6}{46}$ 下
實疑爲天上之美人、降於人間。 $\frac{8}{12}$	散士亦爲之感慨動容。 14 25	夫香以薫自焚、翠以羽自傷。 $\frac{10}{42}$	啓窓視之、乃貧民之羣、乞憐於旅客。 9 77	散士少一尾。 $\frac{1}{91}$	披星而出、戴月以歸、終夜孜孜、積縫織之苦。 $\frac{5}{98}$
幾疑姮娥降塵、洛神出世於是。 $\frac{8}{60}$	散士亦爲之感動眉・縐・鼻・酸。 $\frac{11}{188}$	夫薫以香而自燒、翠以羽而見殺。 $\frac{6}{256}$	開窓視之、貧民成羣、如林如鯽、憐狀可掬、乞憐旅客。 $\frac{7}{508}$	散士輸一尾。 $\frac{9}{573}$	披星而出、戴月而歸、冬夜苦寒、縫織弗息。 $\frac{6}{637}$

(9)	妾は既に、一身を以て、閣下の生				
(8)	散士曰く、始め蹄水の寓居に相見てより、僕の心忪として忘る可からず、晝想夜夢、七日を待つ七月の久きが如し。紅蓮曰く、妾等の郎君を待つ七年の思ありと。 $\frac{10}{51}$ 上	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上
	妾既欲以一身任	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上
	妾既欲以終身託	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上	鳴呼！紅蓮女史、何故に此に在るや。僕をして夢中の夢かと疑はしむ。眞に奇中の奇遇と謂ふ可きなり。今其喜びを述べんと欲して、口の期期たるを如何せんと。紅蓮曰く、妾亦悲喜兩ながら集て、何を語り何を話す可きを知らざるなり。 $\frac{19}{50}$ 上

(13)	(12)	(11)	(10)
且將軍、千言萬語、以て其姓名を掩はんと欲するも余は將軍の麾下に屬し、曾て役に西	戎装の美、衆中に抽で粲然目を奪ふ。身、長大にして肉も豐肥に、眼光爛として麾下の電の如し。 19 99上	勗めよや將士、躊躇罪を得る勿れ。 10 87下	殺に任ぜんと欲す、閣下の行為を明にせずして可ならんやと。 22 65上
且將軍雖千言萬語、欲掩其姓名、然余曾屬將軍之	戎装之美、粲然奪目。身材高大、體甚丰壯、眼光爛然如巖下之電。 14 217	勗哉！將士！勿躊躇致罪。2 189	閣下之生殺、故乃欲明閣下之行爲焉。7 139
且將軍千言萬語、欲以掩其姓名、不知余嘗授將軍	戎装之美、粲然奪目。身體長大、容貌奇偉、眼光燦如電閃。 11 1322	勗哉！將士！發憤以脫牛馬之軛哉！3 1176	於閣下、豈可不明閣下之行爲哉？6 834
		感歎者哉？5 74上	兩君各抱曠世之才、不顧利害生死、輕身而蹈于虎狼之下。天下之人知者、誰不感歎者哉？5 74上

<p>都に従ふ者、豈將軍を忘る、あらんや。 $\frac{1}{100上}$</p>	<p>麾下、從役西都、豈將軍忘之耶？ $\frac{15}{218}$</p>	<p>之麾下、從役西都、將軍或亦忘余、余豈忘將軍哉？ $\frac{9}{1381}$</p>
<p>紅蓮、二人を顧みて曰く、談話の爲めに、日景の既に傾くを忘る。顧ふに兩君大に飢ゑたるべし。妾聊か麤餐を備へ、又更に語るべしと。 $\frac{6}{108下}$</p>	<p>紅蓮顧二人曰：「爲談話忘日影之已傾。兩君必飢、妾聊備粗餐、可更相語。」 $\frac{1}{239}$</p>	<p>紅蓮顧二人曰：「談論歡暢、忽忘日逝。兩君想必飢餓也。妾聊備麤糲、以娛嘉賓。」 $\frac{3}{1453}$</p>

(傍点筆者)

右に挙げた十四個所の訳例は、いずれも語氣や語彙を改めたり、意味を補述した意識ではあるが、原文と比較対照して見た時、やはり梁訳本の訳文の方が、原文よりも優れていると、私が拙稿に挙げたものである。いま、更に上海本の訳文を付して比較をして見ることにする。

まず、(1)では、上海本は「實疑爲天上之美人、降於人間。」と原著を忠実に訳したのに対し、梁訳本は、原著の「天上の美人」という抽象的な表現を、月世界の美人「嫦娥」と洛水の女神「宓妃」と具体的な美人の代表的イメージに換えて訳し、美人に対するイメージが鮮やかである。その上、「幾疑姮娥降塵、洛神出世於是。」と、「幾疑」は

とんど」と疑ふ。もう少しのところできと間違えるところだ。」の方が「實疑」よりも味わいがあり、また、「姮娥降塵」・「洛神出世」と綺麗な対句を使って、「天上の美人降て人間に在る」ことを強く、鮮明に、美しく表現している。

(2)では、上海本の訳文は「散士亦爲之感慨動容」と、「感動」を「感慨」に換えたほかは、書き下し文の漢文への完全なる復元であるといえよう。これに対し、梁訳本は原著の「容を動かす」という言い方を、「眉・鼻・酸」(憂いのために眉をひそめ、悲しみのために鼻がジーンとする。)と具体的な表現に換え、感動したさまが生きて生きている。

(3)では、上海本は原著の「焼」を「焚」に換えたほかは、書き下し文を漢文に復元する訳し方であると言つてよいだろう。これに対し、梁訳本の方は、前半の主語「香」と状況語「薰」を互いに取り換えている。これは両字をそれぞれ第一義的な意味(「香」はかおり。「薰」は香草の名。)に用い、原著の誤りを正したのである。「自ら傷る」を「見殺」改めたことによつて、原文の対句よりも変化があつて、すばらしい。原著の前半「香は薰を以て自ら焼け」は、漢書、龔勝伝の「嗟摩！薰以香自燒，膏以明自銷，龔生竟天年，非吾徒也。」(薰草は香りを持つてゐるばかりに焼かれる災にあう)に基づくものであり、後半の「翠は羽を以て自ら傷る」は、新論、韜光の「翠以羽自殘，龜以智自害。」(かわせみは美麗な羽があるから却つて殺される。)に基づいており、梁訳本の方が上海本よりも、前句において出典に合致している。

(4)では、上海本はほぼ原著を忠実に訳しているが、梁訳本は「如林如鯽、慘狀可掬」(林の如く鯽の如く数えきれないぐらい沢山で、その悲惨な状況はくみとれるぐらいはつきり現われている)の八字を加えることによつて、「貧民群を爲し」のさまが生きて生きていると描写されている。

(5)の原著「散士一尾を贏す」とは、散士が波寧流女史との魚釣競争で一尾の差で負けたことを記している。しかし、「贏」という字は、「あまる・もうけ・になう・勝つ・みちる」の意で、うっかりすると「勝つ」の意に誤解される恐れもある。その点、上海本が「一尾少し」と訳し、梁訳本が「一尾輸ける」と訳したのは妥当である。

(6)では、前半は上海本も梁訳本も皆「披星戴月」という成語を巧みに応用し、原著よりも立派な対句である。しかし、後半になると、上海本は「冬夜」を「終夜」に換えただけで、後は原著を忠実に漢文に復元するやり方で、「終夜孜孜、積縫織之苦」と訳し、「積縫織之苦」は中国の文語文としてぎこちなさを免がれない。これに対し、梁訳本は「冬夜苦寒、縫織弗息」と意訳し、簡潔・整然して、前半と調和が取れ、農民の苦しみをはっきり表わしている。

(7)では、上海本は後半を忠実に「今欲言其樂、而口期期不知作何語。紅蓮曰：『妾亦悲喜雙集，不知作何語也。』」と訳しているが、梁訳本の方は「寸心彷彿、夫復何言？紅蓮曰：『妾亦悲喜交集，一語一話，不知所出也。』」と意訳し、原著のニュアンスをよく表現していると同時に、原著よりも簡潔で、しかも味わいがある。

(8)では、原著の「晝想夜夢」に対し、上海本は「晝夜夢想」（晝夜渴想する意）と訳し、梁訳本は「晝之所思、夜之所夢」の二句に訳している。梁訳本の方がリズムの上から言っても、ニュアンスの上から言っても秀れている。後半の「妾等の郎君を待つ七年の思ありと」に対し、上海本は「尤」（更に）という虚字を加え、「七日如く」を補足して、意味を強化し、はつきりさしてはいるが、梁訳本は「妾等猶有甚焉。相待之切、直不啻七年之久也。」と意訳し、前半の「雖」と同様、「直不啻」（全くのようだ）という虚字を巧みに使い、原著よりも相い待つの切な気持が強調され、変化があり、生き生きとした対話の口調で、優れている。

(9)の原著「妾は既に一身を以て閣下の生殺に任ぜんと欲す」に対し、私は先に拙稿で、「もし『妾既欲以一身任閣下（之）生殺』とでも復元直訳したならば、それこそとんでもない中国文の意味になってしまふ。』と仮定して悪い訳を評したのに、上海本は計らずもそのような悪い訳をしてしまっている。当然梁訳本の「妾既欲以終身託於閣下」と訳した方が、原著の意をよく汲んでおり、立派である。

(10)の原著「縮心縷骨」は、漢語としてなじめない成語で、意味がはつきりしない。そのため上海本は「刻心鏤骨」に改め、原著を忠実に訳している。それに対し梁訳本は原著の「余が爲めに縮心縷骨、一も顧みる所なし」を「不顧利害生死、輕身而蹈于虎狼之下。」と意訳し、意味が明瞭で、敵地に深く入って幽蘭將軍を救出した危険と辛苦をよく表わしている。「曠世の大望」は余り聞き慣れないので、「曠世之才」

に改めている。

(11)では、上海本は「得」を「致」に改めただけで、後は原著を漢文に復元している。それに対し、梁訳本は「發憤以脱牛馬之軛哉！」（発憤して牛馬のくびきの如き奴隸状態から脱出せよ！）と意訳し、エジプトの元帥アラビーパシアが四方に発したイギリスに抵抗する檄文の意をよく汲んでおり、原著よりも力強く、積極的である。

(12)の原著「肉最も豊肥に」は、肥満型のイメージを与え、民族英雄・元帥・闘士であるアラビーパシアに対する描写としては感心できない。この点、上海本は「體甚丰壯」と改め、梁訳本は「容貌奇偉」と改めて、英雄の風采をよく表わしている。その後の「眼光爛として巖下の電の如し」という描写を考えるならば、梁訳本の「容貌奇偉」の方がマッチしているように思える。

(13)の原著「豈將軍を忘るゝあらんや」に対し、上海本は「豈將軍忘之耶？」（豈將軍これを忘るゝや）と表現の仕方を変え（原文の意の取り違えかもわからない）、梁訳本は「將軍或亦忘余、余豈忘將軍哉？」（將軍或亦余を忘るゝとも、余豈將軍を忘るゝや？）と一句仮定文を補充して訳している。この方が曾って部下の者の語氣に適い、生き生きとして強調されているように思う。

(14)の原著「談話の爲めに」に対し、上海本は「爲談話」：と忠実に直訳し、梁訳本は「談論歡暢」：（談論歡暢として）と補足意訳している。また、終りの「妾聊か麤餐を備へ、又更に相語るべし」と。に対し、上海本は「妾聊備粗餐、可更相語。」と忠実に訳しているが、

梁訳本は「妾聊備羈、以娛嘉賓。」（妾聊か羈欄を備へ、以て嘉賓を娛しません。）と補足意訳している。いづれも梁訳本の方が原著よりも談話の和やかな雰囲気が見えられ、女性である紅蓮の口調に通っている。

以上の説明でも分かるように、(5)を除いて、いづれも梁訳本の方が上海本の訳よりも一段と秀れており、原文に優る名訳と評されるだけのところがあると思う。

(B)

<p>(15) 老嫗曰く、賤兒病床に臥し、頭髮久しく梳らず、襟袖永く修めず、固より以て高賓を見る可きなし。 12 41下</p>	<p>老嫗曰：吾兒病臥床、頭髮久未梳、襟袖不整、本不可以見賓客。 10 87</p>	<p>老嫗曰：賤兒病臥於床、久不粧飾、固不可見高賓。 11 571</p>
<p>(16) 且つ久しく此處に止まるも以て女史の志を繼ぐ可からず、以て我事を成す可からず。若からず、迹を晦し遠く此土を通るゝにはと。 21 97上 83下</p>	<p>且久處此土、亦不可繼女史之志、以成我事、不若迹晦遠離爲愈。 4 180</p>	<p>且爵爵久居此、亦非爲計、不如舍地爲良也。 5 1108</p>
<p>(17) 忽ち天妃の飛び来るあり、相助けて天上の樂土に至る。 21 97上</p>	<p>忽有天妃飛來相援、而至天上之樂土。 4 213</p>	<p>忽有天女飛來、相携而同遊月殿。 110 1319</p>

<p>(18) 豈經歴を吐露して、妾等の心事を明にせざらんやと。幾多の來歴を略述し、太息して曰く、 4 98上</p>	<p>豈可不吐露經歴、以明妾等之心事乎？乃略述來歴、而太息曰：12 214</p>	<p>豈能不披肝瀝膽、以相告哉？乃諄諄詳述、不覺太息曰：9 1320</p>
<p>(19) 噫彼の希世苟合の士、尊貴の顔を俛仰し、勢利の間に逶迤し、意に是非なくして之を讀むること、流るゝが如く、言に可否なくして之に應ずること、市に歸するが如く、權重き所は之を戴くこと、玉冠より尊く、勢の去る所は之を棄つること、敝履より易し。 2 22下</p>	<p>噫！彼希世苟合之士、俯仰尊貴之顔、逶迤勢力之間；意無是非、讀之如流；言無可否、應之如響；權重之時、戴之尊逾王冠；勢去之時、棄之易如敝屣。13 43</p>	<p>噫！彼希世苟合之士、俯仰尊貴之顔、逶迤勢力之間；心無是非、惟思媚勢；言無可否、一意趨炎；戴得勢者如玉冠之尊、棄失權者若敝屣之易。12 315</p>
<p>(20) 俗人は目前の利に汲汲として、遠大の志なく、志士は永遠の計を慮て、目前の利を顧みず。 15 35下</p>	<p>俗人汲汲於目前之利、而無遠大之志；志士則惟永遠之計是務、而不顧目前之利。8 74</p>	<p>衆人顧目前之利、忘遠大之志；志士慮永久之策、輕須臾之名。2 507</p>

(21)

嗚呼夫れ霜雪は以て山木、溪草を殺す可きも、以て亭亭たる松柏の操を奪ふ可からず。

1
47上

(22)

妾其手を握り微笑して曰く、夜來多情の雨、行路を遮りて今日手を握るの歡樂を導き、今宵無頼の風、滯雲を掃て明日臂を把るの佳興を妨ぐ。

22
67上

(23)

豈彼の富貴輕薄の徒が、生死を誓ひ黄金已に盡きて反目の人と爲り、質を委ね臣と稱し人の爵祿を受け、厄運艱難に臨み君を離れ國に負くの輩、一場の快樂を貪り偕老を誓ひ、色衰へて相捨て背くが如き徒

嗚呼！夫以霜雪可

可殺、川木、溪草、

而不可奪、亭亭松

柏之操。199

妾握其手微笑曰：

夜來多情之雨、

遮斷行路、致有

今日握手之歡；

今宵無頼之風、

掃去滯雲、有妨

明日把臂之佳興。

9
143

豈如彼富貴輕薄

之徒、以生死相

誓、一旦黄金盡、

則反眼爲若不相

識者、委質稱臣、

受人爵祿、一朝

運會艱難、即視

嗚呼！夫霜雪可

以殺、柔柔蒲柳之

質、而不可以奪

亭亭松柏之操。

2
638

妾握其手微笑曰：

夜雨多情、實導

今朝之握手；而

東風無頼、恐誤

明朝之把臂也。

4
897

豈同富貴輕薄之

徒：其結交也、

初則慷慨誓生死、

及黄金已盡、即

爲反目之人；其

事主也、始則委

質稱人臣、及太

ならん哉。4
32上

(24)

葬を送るもの號慟境を踰え、雲集途に滿ち、花樹魂を祭り、蒼天を望で訴へ、路人涙を灑ぎ、征馬悲嘶し、哀風感を添へ愁雲徘徊す、嗚呼哀矣哉。

12
49下

(25)

夫れ先皇、雄偉の姿を以て大亂を戡定し、仁徳の風を推し、萬姓の腹中に置き、

12
114上

然離君負國、貪

一時之快樂、誓

以偕老、色衰相

捨背信忘義之徒

哉！366

送葬者號慟逾境、

雲集塞途、花樹

祭魂、望蒼天以

訴、路人洒淚、

征馬悲嘶、愁雲

徘徊、哀風添感、

嗚呼哀矣哉！

5
105

夫以先皇雄偉之

姿、戡定大亂、

推仁徳之風、置

於萬姓之腹中。

12
250

難已臨、又爲背

君賣國之賊；幸

際清時、貪廢爵

祿、有事則相捨

而背去者哉！

13
443

送葬者雲集途次、

號慟之聲滿天地、

路人爲之灑淚、

征馬爲之悲鳴、

悲風慘悽、愁雲

黯淡、嗚呼矣哉！

3
699

夫先皇以雄偉之

姿、戡定大亂、

播博濟之仁風、

置萬姓於衽席。

7
1585

右に挙げた十二個所の訳例は、梁訳本の方が原著よりも文の簡潔・整然さの上で優っていると私が曾って指摘したものである。いまその個所の上海本訳と比較をして見よう。

(15)の原著「頭髮久しく梳らず、襟袖永く修めず」に対し、上海本は忠実に「頭髮久未梳、襟袖不整」と訳しているが、梁訳本は贅言の感があるを見てか、「久不粧飾」と意訳し、より簡潔である。

(16)では、上海本が原著を忠実に訳したのに対し、梁訳本は「且鬱鬱久居此、亦非爲計、不如舍地爲良也。」と簡潔に意訳し、しかも原文の内容と雰囲気までもよく表わしている。

(17)の「相助けて天上の樂土に至る」に対し、梁訳本は「相携而同遊月殿」(手を取り合って一緒に月の世界にある宮殿に遊ぶ)と意訳し、上海本の原文に忠実な訳し方よりもイメージがはつきっていて美しい。原著よりも「小舟の一夢」をよく表現している。

(18)では、原著は「經歷を吐露して……幾多の來歴を略述し」と重複した表現をしており、上海本も忠実な訳し方をしたため、同様な嫌いがある。これに対し梁訳本は、前半の二句を「豈能不披肝瀝膽以相告哉?」と一句にまとめ、後半の「幾多の來歴を略述し」を「諄諄詳述」と簡潔に訳し、丁寧な話しぶりまでもよく表現しており、その上「乃不覺」という虚字の使用により、上海本の「乃而」よりも描写が生きている。

(19)の原著は、二句目から

A 尊貴の顔を俛仰し、

A' 勢利の間を逶迤し、

B 意に是非なくして之を讀むること、流るゝが如く、

B' 言に可否なくして之に應ずること、市に歸するが如く、

C 權重き所は之を戴くこと、玉冠より尊く、

C' 勢の去る所は之を棄つること、敝履より易し。

とB'の「市に」が少し引つ掛るはかは、皆綺麗な対句によって構成されて

いている。一方訳文の方もそれに負けず兩方とも綺麗な対句をなして

いる。「上海本」:

A 俛仰尊貴之顔、

A' 逶迤勢力之間、

B 意無是非、讀之如流、

B' 言無可否、應之如響、

C 權重之時、戴之尊逾王冠、

C' 勢去之時、棄之易如敝履。

〔梁訳本〕:

A 俯仰尊貴之顔、

A' 逶迤勢力之間、

B 心無是非、惟思媚勢、

B' 言無可否、一意趨炎、

C 戴得勢者如玉冠之尊、

C' 棄失權者若敝履之易。

と実に伯仲を決めたいものがあり、強いて言えることは、上海本は

原著に忠実であり、梁詠本は変化があつて、意味が明瞭である。

(20)の原著も対句の形はとっているが、しかし、厳密な対句ではなく、特に「目前の利に汲汲として……目前の利を顧みず」と用語の重複があり、余り感心できない。上海本は、

A 俗人汲汲於目前之利，而無遠大之志；

A' 志士則惟永遠之計是務，而不顧目前之利。

と原著を忠実に訳したため、厳密な対句とは言えない。これに対して

梁詠本は、

衆人顧目前之利，忘遠大之志；

志士慮永久之策，輕須臾之名。

と非の打ちところがない原著よりもすばらしい対句である。

(21)の原著は表現の対偶を考慮に入れていないようである。原著に忠実である上海本は「山木」を「川木」に換えただけで、原文を漢文に復元している。これに対し梁詠本は「山木溪草」を全く改めて「柔柔蒲柳之質」となし、下句の「亭亭松柏之操」と対偶をなし、表現をより美しくしている。

(22)の原著は、

A 夜來多情之雨，行路を遮りて今日手を握るの歡樂を導き、

A' 今宵無頼の風，滯雲を掃て明日臂を把るの佳興を妨ぐ。

と綺麗な対句である。しかし、やや繁雑な表現である。上海本は原著に忠実に、

A 夜來多情之雨，遮斷行路，致有今日握手之歡；

A' 今宵無頼之風，掃去滯雲，有妨明日把臂之佳興。

と訳しているが、「致有」に対して「有妨」は余り感心できない。「佳興」に対して「歡」は、対句を考慮に入っていない証拠である。

原著に忠実であるならば、なぜ原著の「歡樂」をそのまま使わなかったのか、不思議である。これに対し梁詠本は、

A 夜雨多情，實導今朝之握手；（而）

A' 東風無頼，恐誤明朝之把臂（也）。

と原著の「行路を遮りて」「滯雲を掃て」の二句を省略し、しかも原著の対偶を損なわないように訳しており、原著よりも簡潔である。

(23)の原著は「豈……哉」と実に九十一字もある冗長繁雑な文である。上海本は原著を忠実に訳したため、同様に繁雑・難解さを免れない。これに対し、梁詠本は、

A 豈同富貴輕薄之徒：

B 其結交也，初則慷慨誓生死，及黃金已盡，即爲反目之人；

B' 其事主也，始則委質稱人臣，及大難已臨，又爲背君賣國之賊；

C 幸際清時，貪饕爵祿；

D 有事則相捨而背去者哉！

と一目瞭然、原著の内容を実によく整理して訳しており、B'の「賣國」の二字を除けば、BとB'は綺麗な駢儷文であり、原著よりも整然としていて分かり易い。

(24)の原著に対し、上海本は忠実に訳しているが、梁詠本は「葬を送るもの號慟境を踰え、雲集途に滿ち」の順序を「BA」に換えている。

この方が実情に合うからである。そして「花樹魂を祭り、蒼天を望で訴へ」の二句を削除している。これによって難解な個所と贅言が省かれ、原著や上海本よりも簡潔で、整然としている。

(25)の原著「仁徳の風を推して萬姓の腹中に置き」はむつかしい表現である。後漢書、光武紀に「降者更相語曰：蕭王推赤心置人腹中，安得不投死乎？」（降参した者が更に話し合つて言うには、蕭王は誠意を以て私達に接している、どうして彼のために命を投げ出さずにいられようか。）という言い方があり、原著はこの言葉を踏まえて使つたものと思う。上海本はこのようなむつかしい表現をそのまま「推仁徳之風・置於萬姓之腹中。」と訳したが、梁訳本は「播・博・濟之仁風、置萬姓於衽席。」（広く救済する仁愛の政治をしき、人民を安らかなしとねの上に置く。）と意訳し、明快で、しかも立派な対句になっている。

以上の例証でも分かるように、これらの訳例においては、ほとんどの梁訳本の訳文の方が原著や上海本の訳文よりも簡潔・整然・明快・綺麗であると言えよう。

(27)	(26)
文は春花の如く思は涌泉の如	醉眼花を生じ顔赤く耳熱し、
	12 30 ^下
	A B
文如春花，思如	倦眼生花，顔赤
	耳熱，4 63
	A B
文如春花，思如	顔赤耳熱，醉眼
	生花，12 44
	A B

(29)	(28)
遂に相携へて羅馬に歸り、名聲頗る損するを顧みず。	紅蓮曰く、貴國の事、論する所無きに非らずと、依違として謂ふ能はざるものゝ如し。
11 110 ^下	8 78 ^下
A B	A B
湧泉。發言可詠，下筆成章。	紅蓮曰：對貴國之事，非無所論，似依違而不能言者。
14 243	8 105
A B	A B
湧泉。下筆成章。發言可詠。	紅蓮依違如不能言者。既而曰：貴國之事，非無所論。
2 1580	5 699
A B	A B

右に挙げた訳例は、皆梁訳本が原著の語順を倒置したことによって、原著よりも文の意味が自然であり、表現もより生き生きとしていると思われる個所である。

(26)の原著は、酒宴酣なるさまの描写である。酒を飲むと、人はまず顔を赤くし、次に耳が熱くなり、更に飲むと眼が朦朧となって、所謂「醉眼花を生じ」の状態になる。であるから梁訳本の語順の方が原著や上海本よりも自然である。

(27)の原著は、波寧流女史の文才のすばらしさを称えている個所である。魏志、陳思王植伝では「言出爲論，下筆成章。」（口を開けば理路

と。
20
49^F

散士曰く、妙謂ふ可からず、壯

は長鯨を屠るが如く、險は崢嶸

を排するに似たり。高く天根

を攀ち深く牛渚を照し、妙意

と争ふ可し。21
85^E

(37)

己れ一旦政權を握るに至り、

漸々自主自由の根を殺ぎ、抑

壓暴制の令を布き、議院は貴

族僧侶を以て組織し、威權と

金權とを以て全く籠絡し、

10
116^E

今夕同歡之友、

明朝安知不爲黃

泉之客？10
105

散士曰：可謂妙

矣。壯如屠長鯨、

險似排崢嶸；高

攀天際、深照牛

渚；妙意佳景、

可通鬼神、與江

山爭榮。11
183

及至一旦握政、

浸漸滅自主自由

之根、布暴制抑

壓之令。議院以

貴族僧侶組織之、

以威權與金權籠

絡之。15
254

今夕同歡之友、

焉知明朝不爲黃

泉之客？6
699

散士曰：佳作妙

不可言。壯如屠

長鯨、險似排崢

嶸；高攀天根、

深照牛渚；據其

妙意則可通鬼神、

繪其佳景則可奪

江山。1
1173

一旦掌握政柄、

布施抑壓暴制之

令、斷絕自由自

主之根。議院則

以貴族僧侶組織

而成、議員則以

威權金權籠絡而

得。4
1656

右に挙げた訳例は、いずれも梁訳本が文の対偶に對し、殊に氣をくばって訳したと思われるもので、いま、上海本と對比しながら検討をして見よう。

(30)では、原著も上海本も別に対偶を考慮に入れていないようであるが、梁訳本は「俯念同人」の四字を加えることによって、

A東望故國、憤氣如雲；

A'俯念同人、激情風烈。

とAとA'を見事な対偶にさしている。

(31)では、原著は全く対偶を考慮に入れていないし、原文を漢文に復元した上海本も当然句の対偶に氣をくばっていない。しかし、梁訳本は、「周流」の二字を加えて、

今郎君負笈以從良師、

周流以接賢達。

と句の対偶をなさせ、文の美觀を計っている。

(32)では、原著は対句をなしていないが、上海本も梁訳本も皆対句に訳している。兩本の伯仲は決めがたい。

(33)と(34)は同じような句法で、原著にも上海本にも対句が見当たらない。しかし、梁訳本は、

(33) A悲英雄之晚節、

A'傷強國之末路。

(34) B感時會之變化、

B'慨天命之無常。

と(33)では「傷」の一字を加え、(34)では「慨」の一字を加えて対応させ、原著よりも語調が美しい。

(37)では、原著は「焉ぞ知らん」を片方にしか使っていないので、対句とは言いがたいが、訳文の方は両本とも見事な対句である。

〔上〕A 今年西土之士、明年安知不爲東海之人？

A' 今夕同歡之友、明朝安知不爲黃泉之客？

〔梁〕A 今年西土之士、安知明年不爲東海之人？

A' 今夕同歡之友、焉知明朝不爲黃泉之客？

と伯仲を決めがたいが、原著の「朝夕を謀らず」は、左伝、昭公元年の「吾儕儉食、朝不謀夕、何其長也。」（私達は一時の安樂をむさぼり俸禄によるその日暮らしのもので、朝には夕方のことまで考えていない。どうしてこのような長久な考えがでましようか。）に基づく成語で、それを梁訳本が「不謀朝夕」と訳したから、上海本に軍配が上がるでしょう。

(38)の原著「妙意佳景、鬼神の會と同じく江山と争ふ可し。」は、対偶をなしていない。それを忠実に訳した上海本も対偶をなしていない。しかし、梁訳本は「攄其」と「繪其」を加えたことによって、

A 攄其妙意、則可通鬼神、

A' 繪其佳景、則可奪江山、

と綺麗な対偶をなし、「壯如」から「江山」まで、三つの対句をなし、原著や上海本よりも美しくなっている。

(39)では、原著も上海本も対偶を計っていないが、梁訳本の方は、「議員則」の三字を加えて、

A 布施抑壓暴制之令、

A' 斷絶自由自主之根；

B 議院則以貴族僧侶組織而成、

B' 議員則以威權金權籠絡而得。

と立派な対偶をなしている。特に、「自由・自主・議院・組織・議員・威權・金權」等と当時流行の新しいイメージを持つ外来漢語をふんだんに使い、面白い対応をさせているのが興味深い。以上挙げた訳例からでも分かるように、梁訳本の方が上海本よりも文の対偶に氣を使い、原著や上海本よりも立派に訳されていることが理解できると思う。

(E)

(38)	
孤雲結て月慘澹、 ² 中泉寂として夜沈沈、白露滴て征衫冷かに、悲風起て丘樹驚き、幽蘭摧けて鳳皇去り、紅蓮折れて鴛鴦離れ、生年淺くして逝日長く、憂患衆くして歡樂尠し。昔は志を同ふし、 ¹⁰ 今は世を異にす。 ¹¹ 舊歡を憶ふて、 ¹² 新悲を増す。悲憤結で誰か憂を解かん。 ¹⁴ 憂心惕として空しく涙を掩	孤雲結而月慘澹、 ² 中泉寂として夜沈沈、白露滴而征衫冷、 ⁹ 悲風起而丘樹驚、 ¹⁰ 幽蘭摧而鳳皇去、 ¹¹ 紅蓮折而鴛鴦離、 ¹² 生年淺而逝日長、 ¹³ 憂患衆而歡樂尠、 ¹⁴ 昔同志、今異世、 ¹⁵ 憶舊歡而增新悲、 ¹⁶ 悲憤解而誰解憂、 ¹⁷ 心悲鬱而誰解、
孤雲結而月慘澹、 ² 中泉寂而夜深沉、白露滴而征衫冷、 ⁹ 悲風起而丘樹驚、 ¹⁰ 幽蘭摧而鳳皇去、 ¹¹ 紅蓮折而鴛鴦離、 ¹² 生年淺而逝日長、 ¹³ 憂患衆而歡樂尠、 ¹⁴ 昔同志、今異世、 ¹⁵ 憶舊歡而增新悲、 ¹⁶ 悲憤解而誰解憂、 ¹⁷ 心悲鬱而誰解、	孤雲結而月慘澹、 ² 中泉寂而夜深沈、白露滴而征衫冷、 ⁹ 悲風起而丘樹驚、 ¹⁰ 幽蘭摧而鳳皇去、 ¹¹ 紅蓮折而鴛鴦離、 ¹² 生年淺而逝日長、 ¹³ 憂患衆而歡樂尠、 ¹⁴ 昔同志、今異世、 ¹⁵ 憶舊歡而增新感、 ¹⁶ 悲憤解而誰解、 ¹⁷

(39)

ふ、 ¹⁵ 嗟乎哀矣哉。 ¹⁶ 尚くは 饗けよ。 ⁶ ⁵⁰ 上	憂心惕然而空掩 淚。嗟呼！哀矣 哉！尚饗。15 105	●●●●●●●● 淚滂沱而莫掩。 嗚呼！哀矣哉！ 尚饗。10 699
悠、悠たる鳴雁、 ² 翼を垂れ て北に行く。 ³ 嗟乎、 ⁴ 我命 薄く、運窮り、 ⁵ 事願と違ひ、 良會の永く絶えたるを恨み、 素懷の通じ難きを傷む。 ⁷ 歐雲米、 ⁸ 水、 ⁹ 萬里處を異にし、 ¹⁰ 各天參商の如く、 ¹¹ 萍蹤定 處なく、 ¹² 離夢躑躅、 ¹³ 別魂 飛揚し風流雨散、 ¹⁴ 別雲の 如く、 ¹⁵ 蘭摧け鳳去り、 ¹⁶ 祇に妾 が情を攪す。 ⁴ ³⁴ 上	悠、悠鳴雁、垂翼 北行。嗟乎！我 命薄、運窮、事與 願違；恨良會之 永絶、傷素懷之 難通；歐雲美水、 萬里異處；如參 商各天、萍蹤莫 定；夢離躑躅、 別魂飛揚；風流 雲散、別恨頻生； 蘭摧鳳去、祇攪 妾情。4 71	●●●●●●●● 懷之難通；歐雲 米、水、萬里異鄉； 萍蹤無定、彼參 此商；離夢躑躅、 別魂飛揚；風流 雨散、一別堪傷； 蘭摧鳳去、祇攪 妾腸。7 448

右に挙げたのは「佳人之奇遇」の美文と思われる個所で、それに対し、梁訳本が如何に原著の美文調を損わないで、画竜点睛したかを例証したい。

(38)の原著は、散士がアイルランド独立党の首魁波寧流女史の霊を弔

った「祭文」の最後のところである。「維れ：嗟乎哀矣哉。尚くは饗けよ。」と中国の祭文の形式を取り、実に名漢文調の美文である。原著は対句の形を取っており、そのまま漢文に復元すれば、立派な中国の文語訳になるはずのものを、上海本と梁訳本はどのように訳したか、比較をして見よう。先ず、最初の一对に対し、

〔上〕A 孤雲結而月慘澹，
A' 九泉寂而夜沈沈；
〔梁〕A 孤雲結而月慘澹，
A' 中泉寂而夜深沈；

と上海本は原著の「中泉」を「九泉」（冥土）に改めている。「中泉」は「新の王莽の作つた銭名」の意で、このままでは意味が取りにくいから「九泉」に改めたと思う。梁訳本は「沈沈」を「深沈」に改めている。この方が前句の「慘澹」と同じく疊韻語で、対偶が巧みである。「沈沈」は疊語であるから、同じ疊語のものと対応させなければならない。

次に、梁訳本は原著の第八句の「憂患衆」を「憂患多」に改めている、その方が通順明快である。最後に、第九句以降に対し、

〔上〕A 昔同志，
A' 今異世；
〔梁〕A 昔同志，〔廣韻〕
A' 今異世；〔雲韻〕

B 憶舊歡而増新悲
B' 憶舊歡；〔梁韻〕
C 悲憤解而誰解憂，
C' 増新感；〔感韻〕
D 憂心惕然而空掩淚。
D' 心悲鬱而誰解，
C' 心悲鬱而誰解，
C' 淚滂沱而莫掩。〔檢韻〕

と上海本は原著の第十一・十二の対句を壊し、第十三・十四の両句も

対句にはなっていない。これに対し、梁詠本は第十二句の「悲」を「感」に換えて「悲」字の二句連続使用を避けると共に、句末の叶韻をも考慮に入れているようである。そして第十三句の前出の字「結・憂」を刪去して六字句に改め、第十四句は「滂沱」を加えて「悲鬱」と対応させ、「掩」を句末にした六字句に仕上げて、前句と対句をなし、「増新感」とも叶韻していてリズムがよい。その上、「七・七・七・七・七・七・七・三・三・三・三・六・六」という字数の句によって構成され、整然でまた変化があり、対句・音律・句形・意味等から言っても、原著や上海本よりもすばらしいでさばえである。

③の原著は、スペインの佳人幽蘭が老父を救出するため、急遽スペインへ赴く時に、散士に彼女の悲痛な心境を告げたラブレターである。「惨は、亂離より惨なるは莫く、悲は、生別より悲きはなし。……涙を揮ひ、謹で別離を告ぐ。願くば、郎君邦家の爲めに努力自愛せよ。」とこれまた実に格調高い、名漢文調の美文である。私は「佳人之奇遇」を読む度ごとに、著者の漢文の素養の高いのに驚くが、いまこの美文に対し、上海本と梁詠本がどのように訳したかを比較検討して見よう。

〔上〕悠悠鳴雁，

〔梁〕哀哀鴻雁，

垂翼北行。

垂翼北行；

嗟乎！我命薄運窮，

嗟余命薄，

事與願違；

事與願違；

恨良會之永絕，

恨良會之永絕，

傷素懷之難通；

傷素懷之難通；

8 歐雲美水，
9 萬里異處；
10 如參商各天，
11 萍蹤莫定；
12 夢離躑躅，
13 別魂飛揚；
14 別恨頻生；
15 蘭摧鳳去，
祇攪妾情。

8 歐雲米水
9 萬里異鄉；〔陽韻〕
11 萍蹤無定，
10 彼參此商；〔陽韻〕
12 離夢躑躅，
13 別魂飛揚，〔陽韻〕
14 一別堪傷；〔陽韻〕
15 蘭摧鳳去，
祇攪妾腸。〔陽韻〕

と上海本は原著の第六句の「恨」を「悵」に、第八句の「米」を「美」に、第十二句の「離夢」を「夢離」に改め、第十四句の「一別雲の如く」を「別恨頻生」に訳したほかは、全部原著を漢文に復元するやり方で訳しており、このため、第三句は二字句、第四句は五字句、第十句も五字句になり、句の字数が整然となっていない。第十三句の「別魂」との対応から言って、「離夢」を「夢離」に改めたのは感心できない。

一方、梁詠本は第一句の「悠悠鳴雁」を「哀哀鴻雁」に改めたことによって、流離の悲痛さがよく表わされ、二句目以降のイメージとよくマッチしている。なぜならば、「鴻雁」は詩経・小雅、鴻鴈之什の篇名でもあり、災難で流離した民をも表わし、「鴻鴈于飛・哀鳴嗷嗷」という詩経の句から「鴻鴈哀鳴」は、民が災乱流離に遭うさまを表わ

すので、「哀哀鴻雁」は「悠悠鳴雁」よりも離散の悲しみを表わす上ですばらしい。第三句・第四句を「嗟余命薄」の四字句にまとめたのは、明らかに梁訳本は句の字数をととのえることに気をくばっており、句が整然となつて美しい。ここで特に注意してもらいたいのは、第九句の「處」を「郷」に改め、第十句と第十一句を倒置し、第十四句の「一別雲の如く」を「一別堪傷」と訳し、第十五句の「情」を「腸」に改めたのは、明らかに押韻するためである。そうすることによって偶数句の末字は「郷・商・揚・傷・腸」と皆「陽」韻で押韻され、見事な韻文となり、四字句と六字句だけによって構成される四六駢儷体に訳されて、原著以上の美文になっていると言えよう。日本語を未だ学んでいない梁啓超が、このように原著や上海本よりもすばらしい美文に訳すとは、全くその文才に感歎させられるのである。これならば、当時「實に立派な、原文以ともいふべき名文」と評され、先に訳していた武田範之氏の訳をして中止させたというエピソードも、まんざらうそではないように思う。

(F) 前述の拙論に挙げなかったものの中で、梁訳本の訳が原著や上海本の訳よりもすばらしいと思われる個所が次の如きある。

(40)	散士、頭を擧げて遠く之を望めば、一妃已に出て門頭に待つ。髣髴として輕雲の新月	散士擧首遠望、一妃已出門待於門首、髣髴如輕	散士擧頭、則已有一妃待於門外。遠望之、髣髴如
------	--	-----------------------	------------------------

(43)	(42)	(41)
壁落ち屋破れ、以て風雨を避くるに足らず、露繁く衣の以て寒を防ぐなく、霜隕ち履の以て足を包むなし。 3 46下	蓋し聞く、梅蕾春に魁ては、霜雪之を痛めて、後に微妙の香あり。豪傑未だ時を得されば、造物頻りに厄に遭はしめて、遂に萬世の功名を留むと。 11 34下	眉は遠山の翠を畫きて、鳳鬢雲より緑に、 3 9E 如し。 21 8下
壁破屋落、不足以避風雨、衣不能防寒、履不足裹足。 4 98	蓋聞梅蕾春、霜雪凌之、而後始有微妙之香；豪傑不遇、造物頻加之以厄難；乃成萬世之功名。 8 72	雲之蔽新月、近見之如皓然之白鶴玉立仙堵。 3 12 眉畫遠山之翠、鬢雲增綠、 5 12
壁落屋破、莫蔽風雨；露繁無衣以禦寒，霜隕無履以裹足。 5 637	蓋聞梅蕾春、必經霜雪而香始妙；豪傑冠世，必歷災厄而名始成。 8 505	輕雲之蔽新月；近視之，皎潔若白鶴之立仙堵。 5 60 眉畫遠山之翠，鬢堆螺頂之雲， 6 60

(40)の原著は対偶を考慮に入れていないようで、それをほぼ忠実に訳した上海本は、勿論対偶になっていない。ところが、梁訳本は「遠く之を望ば」を後に移動して、

遠望之、髣髴如輕雲之蔽新月；
近視之、皎潔若白鶴之立仙堦。

と「近て之を見れば」と対応さし、綺麗な対偶に仕上げており、「如し」を「若に」換えて、一層変化をもたらし、美人の描写が原著よりも美しい。

(41)では、「鳳鬢雲より緑に」を「鬢堆螺頂之雲」(両鬢は螺の頂きの如き雲をうずたかくしたようだ)に意訳して、「眉畫遠山之翠」と立派な対応をなしている。面白い表現でもある。

(42)では、原著の三句つづの表現を二句に縮め、
〔古〕A 梅蕾魅春，霜雪凌之，而後始有微妙之香；

B 豪傑不遇，造物頻加之以厄難，乃成萬世之功名。

〔異〕A 梅蕾魅春，必經霜雪而香始妙；
A' 豪傑冠世，必歷災厄而名始成。

と上海本や原著よりも簡潔・明瞭・整然となっている。

(43)では、二句目の「以て風雨を避くるに足らず」を「莫蔽風雨」の四字に圧縮し、「四・四・七・七」の句数に整理してしまっている。たしかに原著以上の名文になっていると言えよう。

三

次に明治十八年(一八八五)出版の博文堂本・光緒二十四年(一八九八)訳載の清議報本・昭和五年(一九三〇)出版の春陽堂本・民国二十四年(一九三五)翻訳の上海中国書局本・昭和四十年(一九六五)出版の筑摩書房本等五本の「佳人之奇遇」の誤字、誤植等に依る文字の異同を表に表わすと、次の如きである。

博 文 堂			清 議 報			春 陽 堂			上 海 本			筑 摩 本		
行頁 卷														
A 3	A 2	A 1	魔×	(省略)	晚。	麗。	猶×	し×	麗。	獨。	晚。	麗。	獨。	晚。
壯麗ノ聖寺ハ <small>セント・ペートルス・チヨルサ</small>	獨リ惆悵ンテ	晚風衣裳ヲ	12 58	4 58	5 57	21 7下	5 7下	14 6下	10 9	9 8	11 6	24 6下	3 6下	1 6上

○C 16	○C 15	A 14	A 13	A 12	A 11	A 10	△A 9	A 8	○C 7	○C 6	A 5	A 4
一犬虚ヲ吠ヘテ萬犬實ヲ傳ヒ	大聲ノ里耳ニ入り難キ	朝令暮改ノ弊政	爲ス可カラサル	亂人ノ脅迫	女皇伊佐米刺 イサヘラ	美人伉儷	幽谷蕙蘭空懷香 シタラ	道ナキニ苦ミ	清楊宛兮 タリ	有美一人 リナル	一妃輕裾ヲ提ケ	彷徨躊躇ス
$1\frac{5}{24}$ 裏	$1\frac{2}{24}$ 裏	$1\frac{6}{23}$ 裏	$1\frac{9}{21}$ 裏	$1\frac{1}{16}$ 裏	$1\frac{10}{15}$ 表	$1\frac{10}{13}$ 表	$1\frac{2}{13}$ 表	$1\frac{8}{11}$ 裏	$1\frac{4}{11}$ 表	$1\frac{4}{11}$ 表	$1\frac{1}{10}$ 表	$1\frac{1}{10}$ 表
影× 百△	難× (高論難行)	弊○	(省略)	民○	佐○	美×	懷○	與× (無)	楊×	美人× 今×	一○ 提○	徨○
$\frac{2}{128}$	$\frac{1}{128}$	$\frac{6}{127}$	$\frac{3}{126}$	$\frac{1}{123}$	$\frac{5}{122}$	$\frac{1}{121}$	$\frac{11}{60}$	$\frac{3}{60}$	$\frac{11}{59}$	$\frac{11}{59}$	$\frac{3}{59}$	$\frac{2}{59}$
虚○ 萬○	難×	弊×	る×	入×	位*×	美人○	懷×	なき○	楊×	一× 美人×	二× 掲×	徬×
$\frac{13}{13}$ 下	$\frac{11}{13}$ 下	$\frac{19}{13}$ 上	$\frac{10}{12}$ 下	$\frac{8}{10}$ 下	$\frac{12}{10}$ 上	$\frac{22}{9}$ 上	$\frac{15}{9}$ 上	$\frac{16}{8}$ 下	$\frac{5}{8}$ 下	$\frac{5}{8}$ 下	$\frac{7}{8}$ 上	$\frac{7}{8}$ 上
影× 衆×	難× (不入於)	弊○	可× 爲×	人○	佐○	美人○	懷○	無○	揚◎	美人○ 一人○	一○ 曳○	徨○
$\frac{1}{23}$	$\frac{15}{22}$	$\frac{6}{22}$	$\frac{13}{20}$	$\frac{15}{15}$	$\frac{3}{15}$	$\frac{5}{13}$	$\frac{13}{12}$	$\frac{14}{11}$	$\frac{14}{10}$	$\frac{14}{10}$	$\frac{14}{9}$	$\frac{14}{9}$
虚○ 萬○	難×	弊○	ラ○	人○	佐○	美人○	懷○	ナ○ キ○	楊×	美人○ 一人○	一○ 提○	徨○
$\frac{3}{10}$ 下	$\frac{1}{10}$ 下	$\frac{18}{10}$ 上	$\frac{22}{9}$ 下	$\frac{6}{8}$ 下	$\frac{20}{8}$ 上	$\frac{21}{7}$ 下	$\frac{16}{7}$ 下	$\frac{27}{7}$ 上	$\frac{18}{7}$ 上	$\frac{18}{7}$ 上	$\frac{3}{7}$ 上	$\frac{2}{7}$ 上

A 25	24'	B 24	23'	B 23	22'	A 22	A 21	。C 20	A 19	。C 18	A 17
覺 ヘス三歎。 ス		權理 [×] ト財産		爆烈 [×] 黨ノ淵叢	(清議報第五冊の再訳箇所)	大計ヲ忘。 レ	培克衆怒ヲ [×] 于シ	川ニ活鱗ナク	二十回ニシテ	板蕩ニ誠臣ヲ見 [×] ル	自由ノ樂 [。] 境。
$1\frac{8}{36}$ 表		$1\frac{6}{35}$ 裏		$1\frac{2}{35}$ 裏		$1\frac{9}{35}$ 表	$1\frac{1}{34}$ 表	$1\frac{4}{33}$ 裏	$1\frac{1}{33}$ 表	$1\frac{8}{27}$ 裏	$1\frac{10}{24}$ 裏
歎 [×]	政權 [△]	政權 [△]	裂 [◎]	烈 [×]	妾 [×]	妾 [×]	干 [。] 恕 [×]	活 [×]	二 [×] 十 [×] 四 [×] 回 [×]	世亂識忠臣 [△]	卿 [×]
$\frac{12}{249}$		$\frac{8}{249}$	$\frac{6}{311}$	$\frac{6}{249}$	$\frac{4}{311}$	$\frac{4}{249}$	$\frac{6}{192}$	$\frac{3}{192}$	$\frac{10}{191}$	$\frac{4}{188}$	$\frac{5}{128}$
歎 [。]		理 [×]		烈 [×]		忘 [。]	怒 [。] 于 [×]	恬 [。]	二十回 [。]	見 [×] (識)	樂 [。] 境 [。]
$\frac{11}{18}$ 上		$\frac{1}{18}$ 上		$\frac{19}{17}$ 下		$\frac{17}{17}$ 下	$\frac{16}{17}$ 上	$\frac{10}{17}$ 上	$\frac{20}{16}$ 下	$\frac{21}{14}$ 下	$\frac{18}{13}$ 下
嘆 [。]		利 [◎]		烈 [×]		忘 [。]	怒 [。] (省略)	活 [×]	廿 [×] 四 [×] 次 [×]	見 [×] (識)	樂 [。] 境 [。]
$\frac{7}{33}$		$\frac{1}{33}$		$\frac{14}{32}$		$\frac{12}{32}$	$\frac{12}{31}$	$\frac{8}{31}$	$\frac{1}{31}$	$\frac{5}{25}$	$\frac{4}{23}$
歎 [。]		理 [×]		烈 [×]		忘 [。]	怒 [。] 干 [。]	恬 [。]	二十回 [。]	見 [×] (識)	樂 [。] 境 [。]
$\frac{28}{13}$ 上		$\frac{20}{13}$ 上		$\frac{17}{13}$ 上		$\frac{16}{13}$ 上	$\frac{25}{12}$ 下	$\frac{20}{12}$ 下	$\frac{11}{12}$ 下	$\frac{17}{11}$ 上	$\frac{7}{10}$ 下

35'	B 35	A 34	○C 33	B 32	B 31	B 30	○C 29	○C 28	○B 27	26'	A 26	25'
	春風台 [×] 蕩	山岳崩裂下ニ怨 [○] ム	上替レ下凌 [×] キ	辮 [○] 髮左衽ヲ以テ	封疆 [×] ノ臣ニ封疆 [×]	諸城萃ニ陥リ	何蛟 [×] 騰 [×] (騰蛟)(他一出)	鼎 [×] 璉	瞿式耜 [○] (他四出)		直ニ航 [○] シ	
	2 ⁵ / ₆ 裏	2 ⁷ / ₄ 裏	2 ⁶ / ₄ 裏	2 ³ / ₃ 裏	2 ⁸ / ₂ 表	2 ⁶ / ₂ 表	2 ⁷ / ₁ 表	2 ⁴ / ₁ 表	2 ⁴ / ₁ 表		1 ² / ₃₆ 裏	
駘 [○]	臺 [×]	恐 [×]	陵 [◎]	辮 [○]	疆 [×] 疆 [×]	遂 [◎]	蛟 [×] 騰 [×]	鼎 [×] (焦)	矩 [×]	抗 [×]	航 [○]	歎 [○]
$\frac{4}{313}$	$\frac{8}{254}$	$\frac{4}{253}$	$\frac{4}{253}$	$\frac{4}{252}$	$\frac{6}{251}$	$\frac{5}{251}$	$\frac{10}{250}$	$\frac{9}{250}$	$\frac{9}{250}$	$\frac{1}{312}$	$\frac{1}{250}$	$\frac{13}{311}$
	台 [×]	怨 [○]	凌 [×]	辮 [×]	疆 [×] 疆 [×]	萃 [×]	蛟 [×] 騰 [×]	鼎 [×] (焦)	矩 [×]		航 [○]	
$\frac{19}{20}$ 下	$\frac{8}{20}$ 上	$\frac{7}{20}$ 上	$\frac{9}{19}$ 下	$\frac{10}{19}$ 上	$\frac{8}{19}$ 上	$\frac{13}{18}$ 下	$\frac{11}{18}$ 下	$\frac{11}{18}$ 下			$\frac{15}{18}$ 上	
駘 [○]	怨 [○]	凌 [×]	辮 [○]	疆 [○] 疆 [○]	漸 [×]	蛟 [×] 騰 [×]	鼎 [×] (焦)	耜 [○]			直前 [△]	
$\frac{4}{40}$	$\frac{5}{38}$	$\frac{4}{38}$	$\frac{12}{36}$	$\frac{14}{35}$	$\frac{13}{35}$	$\frac{3}{35}$	$\frac{1}{35}$	$\frac{1}{35}$			$\frac{10}{33}$	
臺 [×]	怨 [○]	凌 [×]	辮 [○]	疆 [○] 疆 [○]	萃 [○] 萃 [×]	蛟 [×] 騰 [×]	鼎 [×] (焦)	耜 [○]			航 [○]	
$\frac{24}{15}$ 上	$\frac{16}{14}$ 下	$\frac{15}{14}$ 下	$\frac{28}{14}$ 上	$\frac{11}{14}$ 上	$\frac{10}{14}$ 上	$\frac{21}{13}$ 下	$\frac{19}{13}$ 下	$\frac{18}{13}$ 下			$\frac{3}{13}$ 下	

△D 48	△A 47	○A 46	△D 45	△D 44	△A 43	B 42	A 41	B 40	D 39	A 38	○C 37	○C 36
幽蘭秀ニ通谷ニ	甘心思ニ衰ニ元	悲歌唱ニ兮髮衝冠	白雲散ニ兮月團團	自主ノ刀鋒正ニ犀利	攪權ニ怙勢ニ谿壑張	輕薄于紀ノ輩	民權ノ朋黨	強辨ニシテ	自由ノ里	三百年來	翠ハ羽ヲ以テ自ラ傷ル	香ハ薰ヲ以テ自ラ燒ケ
$2\frac{10}{27表}$	$2\frac{1}{27表}$	$2\frac{5}{26裏}$	$2\frac{4}{26裏}$	$2\frac{1}{25裏}$	$2\frac{5}{25表}$	$2\frac{2}{21表}$	$2\frac{4}{20裏}$	$2\frac{1}{20裏}$	$2\frac{8}{20表}$	$2\frac{5}{17裏}$	$2\frac{1}{9裏}$	$2\frac{10}{9表}$
空△	喪○	怨×	團△ 圓△	立△	攪○ 怙× 慾×	干○	朋○	辯○	理△	三× 百×	見× 殺×	薰● 香● 燒○
$\frac{6}{384}$	$\frac{3}{384}$	$\frac{13}{383}$	$\frac{12}{383}$	$\frac{12}{383}$	$\frac{8}{382}$	$\frac{2}{380}$	$\frac{11}{379}$	$\frac{10}{379}$	$\frac{9}{379}$	$\frac{1}{320}$	$\frac{6}{256}$	$\frac{6}{256}$
通○	衰×	悲○	團○ 圓○	主○	攪× 怙× 谿○	于×	明×	辯○	里○	三○ 百○ 年○	自○ 傷×	香× 薰× 燒○
$\frac{3}{29上}$	$\frac{15}{28下}$	$\frac{10}{28下}$	$\frac{9}{28下}$	$\frac{9}{28上}$	$\frac{3}{28上}$	$\frac{2}{26下}$	$\frac{22}{26上}$	$\frac{20}{26上}$	$\frac{17}{26上}$	$\frac{7}{25上}$	$\frac{1}{22上}$	$\frac{22}{21下}$
通○	表×	悲○	團○ 圓○	主○	攪○ 怙○ 谿○	干○	朋○	辯○	鄉○	三○ 百○ 年○	自○ 傷×	香× 薰× 焚×
$\frac{7}{58}$	$\frac{15}{57}$	$\frac{10}{57}$	$\frac{9}{57}$	$\frac{8}{56}$	$\frac{3}{56}$	$\frac{9}{52}$	$\frac{4}{52}$	$\frac{3}{52}$	$\frac{1}{52}$	$\frac{3}{49}$	$\frac{11}{42}$	$\frac{10}{42}$
通○	喪○	悲○	團○ 圓○	主○	攪○ 怙○ 谿○	于×	朋○	辯×	里○	三○ 百○ 年○	自○ 傷×	香× 薰× 燒○
$\frac{26}{20下}$	$\frac{17}{20下}$	$\frac{12}{20下}$	$\frac{11}{20下}$	$\frac{21}{20上}$	$\frac{16}{20上}$	$\frac{15}{19上}$	$\frac{10}{19上}$	$\frac{8}{19上}$	$\frac{6}{19上}$	$\frac{12}{18上}$	$\frac{5}{16上}$	$\frac{4}{16上}$

B 61	△A 60	C 59	△D 58	△D 57	△DB 56	A 55	B 54	B 53	B 52	A 51	△D 50	A 49
一瘦 ^x 土ノ饑民	手 ^カ 奉 ^ケ ニ檄書 ^ツ ニ訴 ^フ 蒼旻 ^ニ	其容體觀ルニ(錯欠二十一字)	雖 ^モ 微 ^レ 達 ^シ 節 ^{スル} ニ謂 ^フ 之 ^ヲ 可 ^シ 庶 ^フ	荊軻慕 ^ヒ 燕丹之義 ^ヲ	昔聶 ^ニ 政殉 ^シ 嚴遂之顧 ^ニ	柳樹ヲ白 [◎] シテ書ス	朝廷 ^x ノ弊政	苑卿 ^ニ 棹 ^ヲ 休 ^メ	棹 ^ヲ 執ル	紅蓮玉簫 ^ヲ 吹キ	窓暗 ^{シテ} 月色青 ^{△シ}	鳳皇ヲ引 ^ケ トモ
$3\frac{1}{19}$ 裏	$3\frac{4}{18}$ 表	$3\frac{6}{8}$ 表	$3\frac{9}{2}$ 表	$2\frac{8}{2}$ 表	$3\frac{8}{2}$ 表	$3\frac{6}{2}$ 表	$2\frac{6}{37}$ 表	$2\frac{3}{37}$ 表	$2\frac{10}{36}$ 裏	$2\frac{5}{31}$ 裏	$2\frac{2}{28}$ 裏	$2\frac{1}{28}$ 表
瘠 [◎]	訴 [○] 旻 [○]	(錯欠二十九字)	雖 [◎] 非達 [◎] 節 [◎] 其庶幾 ^乎	義 [○]	聶 [○] 難 [◎]	白柳樹有書 ^x	廷 [○]	棹 [○]	(省略)	簫 [○]	清 [◎]	引 [○]
$\frac{11}{569}$	$\frac{11}{512}$	$\frac{6}{507}$	$\frac{13}{447}$	$\frac{13}{447}$	$\frac{13}{447}$	$\frac{11}{447}$	$\frac{5}{445}$	$\frac{3}{445}$	$\frac{2}{445}$	$\frac{11}{441}$	$\frac{2}{441}$	$\frac{10}{384}$
瘦 ^x	訴 [○] 吳 ^x	(同博文堂)	(同博文堂)	義 [○]	攝 ^x 顧 [○]	れ ^x	庭 ^x	棹 ^x	棹 ^x	風 ^x	青 [△]	引 ^x く
$\frac{18}{40}$ 上	$\frac{16}{39}$ 下	$\frac{1}{36}$ 上	$\frac{10}{33}$ 下	$\frac{9}{33}$ 下	$\frac{9}{33}$ 下	$\frac{7}{33}$ 下	$\frac{15}{32}$ 下	$\frac{12}{32}$ 下	$\frac{10}{32}$ 下	$\frac{9}{30}$ 下	$\frac{22}{29}$ 上	$\frac{13}{29}$ 上
瘦 ^x	訓 ^x 冥 ^x	字(錯欠二十三)	(同博文堂)	意 ^x	聶 [○] 顧 [○]	柳樹有白書 ^x	廷 [○]	棹 [○]	棹 [○]	簫 [○]	青 [△]	引 [○]
$\frac{2}{85}$	$\frac{1}{84}$	$\frac{14}{74}$	$\frac{15}{69}$	$\frac{15}{69}$	$\frac{14}{69}$	$\frac{13}{69}$	$\frac{5}{68}$	$\frac{3}{68}$	$\frac{2}{68}$	$\frac{15}{62}$	$\frac{9}{59}$	$\frac{13}{58}$
瘦 ^x	訴 [○] 旻 [○]	(同博文堂)	(同博文堂)	義 [○]	聶 [○] 顧 [○]	白 ^x し ^x	庭 ^x	棹 [○]	棹 [○]	簫 [○]	青 [△]	引 [○] ケ
$\frac{23}{29}$ 上	$\frac{4}{29}$ 上	$\frac{28}{26}$ 上	$\frac{19}{24}$ 下	$\frac{18}{24}$ 下	$\frac{18}{24}$ 下	$\frac{17}{24}$ 下	$\frac{22}{23}$ 上	$\frac{20}{23}$ 上	$\frac{18}{23}$ 上	$\frac{2}{22}$ 上	$\frac{14}{21}$ 上	$\frac{6}{21}$ 上

BA 74	A 73	A 72	B 71	B 70	△D 69	△A 68	△A 67	A 66	○C 65	○C 64	A 63	B 62
孤雲結テ月。慘憺×	長空。敵。然。又。：	頻。ニ。殃。禍。ニ。遭。ヒ	辨 [×] 奔馬ノ如シ	雄辨 [×] ニハ	好 ^シ 除 ^テ 獨 ^ヲ 夫 ^ニ 興 ^シ 新政 ^ニ	雲黯。瀟。兮。山。川。愁 ^ヘ	羅織場荒 ^{レテ} 。爐灰冷 ^ニ	已。ニ。之。ヲ。知。ル	之。ヲ。桑。梓 [×] ニ。得。タ。リ	之。ヲ。東。榆 [×] ニ。失。シ。テ	何。ニ。カ。譬。ヘ。ン	百。里。玉。趾。ヲ。扞 [×] ク
$\frac{4}{5}$ 表	$\frac{4}{2}$ 表	$\frac{4}{1}$ 表	$\frac{3}{36}$ 裏	$\frac{3}{35}$ 裏	$\frac{3}{34}$ 表	$\frac{3}{34}$ 表	$\frac{3}{33}$ 裏	$\frac{3}{31}$ 裏	$\frac{3}{26}$ 表	$\frac{3}{26}$ 表	$\frac{3}{23}$ 表	$\frac{3}{23}$ 裏
日 [×] 澹 [○]	敵 [○]	頻 [×]	辨 [×]	辨 [×]	鄙 [△]	黯 [○]	荒 [○]	己 [×]	於 [×] 榆 [×] 収 [◎]	於 [×] 隅 [○]	隅 [○] 極	枉 [◎]
$\frac{10}{699}$	$\frac{13}{641}$	$\frac{5}{641}$	$\frac{4}{638}$	$\frac{10}{637}$	$\frac{12}{636}$	$\frac{10}{636}$	$\frac{4}{636}$	$\frac{13}{576}$	$\frac{11}{573}$	$\frac{11}{573}$	$\frac{3}{572}$	$\frac{3}{572}$
月 [○] 憺 [×]	嗽 [×]	頻 [○]	辯 [◎]	辯 [○]	獨 [○]	黯 [×]	荒 [×] テ	已 [○]	之 [○] 梓 [×] 得 [×]	之 [○] 榆 [×]	譬 [×]	扞 [×]
$\frac{6}{50}$ 上	$\frac{1}{49}$ 上	$\frac{6}{48}$ 下	$\frac{6}{47}$ 上	$\frac{14}{46}$ 下	$\frac{11}{46}$ 上	$\frac{9}{46}$ 上	$\frac{1}{46}$ 上	$\frac{6}{45}$ 上	$\frac{3}{43}$ 上	$\frac{3}{43}$ 上	$\frac{2}{42}$ 上	$\frac{2}{41}$ 上
月 [○] 澹 [○]	敵 [○]	頻 [○]	勢 [△]	辯 [○]	獨 [○]	黯 [○]	荒 [○]	已 [○]	今 [×] 之 [○] 榆 [○] 得 [×]	之 [○] 隅 [○]	喻 [○]	舉 [△]
$\frac{15}{105}$	$\frac{14}{103}$	$\frac{4}{103}$	$\frac{11}{99}$	$\frac{11}{98}$	$\frac{11}{97}$	$\frac{9}{97}$	$\frac{2}{97}$	$\frac{5}{94}$	$\frac{4}{91}$	$\frac{4}{91}$	$\frac{5}{88}$	$\frac{5}{88}$
月 [○] 憺 [×]	敵 [○]	頻 [○] キ	辨 [×]	辨 [×]	獨 [○]	黯 [○]	荒 [○] レテ	已 [○]	之 [○] 梓 [×] 得 [×]	之 [○] 榆 [×]	譬 [○]	扞 [×]
$\frac{18}{35}$ 下	$\frac{6}{35}$ 上	$\frac{16}{34}$ 下	$\frac{18}{33}$ 下	$\frac{7}{33}$ 下	$\frac{16}{33}$ 上	$\frac{14}{33}$ 上	$\frac{6}{33}$ 上	$\frac{3}{32}$ 下	$\frac{15}{31}$ 上	$\frac{15}{31}$ 上	$\frac{25}{30}$ 上	$\frac{24}{30}$ 上

B 87	A 86	△D 85	△A 84	△A 83	△D 82	△D 81	A 80	A 79	。C 78	A 77	B 76	D 75
主 [×] 城長曰ク	怨 ^ミ ノ府マル	曠昔 ^ハ 之夜無 ^ニ 此歡 ^ニ	萬斛 ^ノ 深愁奈 ^レ 難 ^キ 遣 ^ヲ	繁霜埋 ^ム 頭 ^ヲ 雪印 ^ス 眉 ^ヲ	滿目晝暗 [△] 草苑苑	幾 ^{タヒカ} 使 ^ム 遷客 ^ヲ 發 ^セ 長歎 ^ヲ	汽船ニ搭 ^ス	名 [。] ハ主タリ……	樹靜ナラン……	眼 [。] 冷カニ	白露滴 ^テ 征衫 [×] 冷カニ	中 [×] 泉寂トシテ夜沈沈
$4\frac{10}{23}$ 裏	$4\frac{4}{21}$ 裏	$4\frac{6}{19}$ 裏	$4\frac{6}{18}$ 裏	$4\frac{1}{18}$ 裏	$4\frac{10}{18}$ 表	$4\frac{9}{18}$ 表	$4\frac{10}{16}$ 表	$4\frac{5}{9}$ 裏	$4\frac{6}{8}$ 裏	$4\frac{5}{5}$ 裏	$4\frac{7}{5}$ 表	$4\frac{6}{5}$ 表
主 [×]	怨 ^ノ 府 [△]	日 [×]	悲 [×] 遣 [。]	盾 [×]	陰 [◎]	通 [△] 客 [△] 長 [△] 浩 [△]	搭 [。]	名 [。]	(錯 [×] 二字)	眠 [×]	衫 [。]	中 [×]
$\frac{7}{762}$	$\frac{4}{761}$	$\frac{1}{760}$	$\frac{2}{759}$	$\frac{12}{706}$	$\frac{11}{706}$	$\frac{10}{706}$	$\frac{11}{705}$	$\frac{6}{702}$	$\frac{11}{701}$	$\frac{2}{700}$	$\frac{11}{699}$	$\frac{10}{699}$
主 [×]	た [×]	夜 [。]	愁 [。] 遣 [×]	眉 [。]	暗 [△]	遷 [。] 客 [。] 發 [。] 長 [。]	塔 [×]	各 [×]	(同博文堂)	眼 [。]	衫 [×]	中 [×]
$\frac{1}{57}$ 下	$\frac{5}{56}$ 下	$\frac{16}{55}$ 下	$\frac{19}{55}$ 上	$\frac{15}{55}$ 上	$\frac{14}{55}$ 上	$\frac{13}{55}$ 上	$\frac{1}{54}$ 下	$\frac{17}{51}$ 下	$\frac{1}{51}$ 下	$\frac{15}{50}$ 上	$\frac{7}{50}$ 上	$\frac{6}{50}$ 上
守 [。]	怨 ^ノ 府 [△]	夜 [。]	愁 [。] 遷 [×]	眉 [。]	暗 [△]	(同 [。] 上 [。])	搭 [。]	名 [。]	(錯 [×] 一字)	眼 [。]	衫 [。]	九 [◎]
$\frac{15}{121}$	$\frac{12}{119}$	$\frac{6}{118}$	$\frac{6}{117}$	$\frac{2}{117}$	$\frac{2}{117}$	$\frac{15}{116}$	$\frac{2}{115}$	$\frac{4}{110}$	$\frac{10}{109}$	$\frac{14}{106}$	$\frac{1}{106}$	$\frac{15}{105}$
守 [。]	マ [。]	夜 [。]	愁 [。] 遣 [。]	眉 [。]	暗 [△]	(同 [。] 上 [。])	搭 [。]	名 [。]	(同博文堂)	眼 [。]	衫 [×]	中 [×]
$\frac{22}{40}$ 下	$\frac{18}{40}$ 上	$\frac{20}{39}$ 下	$\frac{2}{39}$ 下	$\frac{26}{39}$ 上	$\frac{25}{39}$ 上	$\frac{24}{39}$ 上	$\frac{24}{38}$ 下	$\frac{6}{37}$ 上	$\frac{20}{36}$ 下	$\frac{24}{35}$ 下	$\frac{18}{35}$ 下	$\frac{18}{35}$ 下

D 100	A 99	B 98	。B 97	A 96	A 95	A 94	A 93	。C 92	B 91	B 90	B 89	A 88
大。西。洋。ヲ。航。ス	一。千。八。百。六。十。六。年	徒。ニ。輕。舉。暴。動	大。行。ハ。細。瑾。ヲ。顧。ミ。ス	四。ニ。飛。鳥。ノ。聲	幽。蘭。女。史。ヲ。搖。カ。シ	范。老。獨。リ。樹。根。ニ	農。夫。ノ。裝。ヲ。爲。シ	孫。子。曰。ク。水。ノ。形。… (錯。二。字)	辨。解。甚。タ。易。ム	澆。淳。浮。薄。ノ。今。日	主。城。長。ノ。手。ヲ	仇。儼。ヲ。求。ム。ル。ニ
$\frac{5}{36}$ 表	$\frac{5}{33}$ 表	$\frac{5}{27}$ 裏	$\frac{5}{27}$ 表	$\frac{5}{22}$ 裏	$\frac{5}{20}$ 裏	$\frac{5}{13}$ 表	$\frac{5}{12}$ 裏	$\frac{5}{11}$ 表	$\frac{5}{10}$ 裏	$\frac{5}{3}$ 表	$\frac{4}{37}$ 裏	$\frac{4}{26}$ 表
太。平。×	六。十。×	妄。◎	瑾。×	四。○	揮。×	猶。×	儒。× (參。農。裝)	(錯。二。字)	辨。×	季。◎	主。×	求。○
$\frac{4}{1039}$	$\frac{8}{911}$	$\frac{3}{968}$	$\frac{1}{968}$	$\frac{7}{965}$	$\frac{6}{902}$	$\frac{13}{897}$	$\frac{9}{897}$	$\frac{11}{896}$	$\frac{7}{834}$	$\frac{4}{832}$	$\frac{4}{830}$	$\frac{10}{763}$
大。西。○	六。十。六。○	暴。×	瑾。×	四。○	搖。○	獨。○	(同。博。文。堂)	(同。博。文。堂)	辯。◎	淳。×	守。○	「有。衍。文。に。於。む。る。に。」
$\frac{12}{76}$ 下	$\frac{9}{75}$ 下	$\frac{1}{73}$ 下	$\frac{19}{73}$ 上	$\frac{6}{71}$ 下	$\frac{19}{70}$ 下	$\frac{20}{67}$ 下	$\frac{11}{67}$ 下	$\frac{7}{67}$ 上	$\frac{2}{65}$ 下	$\frac{3}{64}$ 上	$\frac{13}{62}$ 下	$\frac{17}{58}$ 上
大。西。○	六。十。六。○	暴。×	謹。◎	回。×	搖。○	獨。○	爲。農。夫。之。裝	(錯。三。字)	辨。×	澆。△ 薄。△	守。○	求。○
$\frac{13}{163}$	$\frac{5}{161}$	$\frac{11}{156}$	$\frac{8}{156}$	$\frac{3}{152}$	$\frac{13}{150}$	$\frac{7}{144}$	$\frac{1}{144}$	$\frac{15}{142}$	$\frac{9}{139}$	$\frac{5}{136}$	$\frac{3}{133}$	$\frac{2}{124}$
大。西。○	六。十。六。○	暴。×	瑾。×	四。○	搖。○	獨。○	(同。博。文。堂)	(同。博。文。堂)	辨。×	淳。×	守。○	求。○ ム。ル。ニ
$\frac{6}{55}$ 上	$\frac{6}{54}$ 下	$\frac{13}{53}$ 上	$\frac{10}{53}$ 上	$\frac{2}{52}$ 上	$\frac{6}{51}$ 下	$\frac{2}{49}$ 下	$\frac{22}{49}$ 上	$\frac{1}{49}$ 上	$\frac{27}{47}$ 下	$\frac{21}{46}$ 下	$\frac{22}{44}$ 上	$\frac{24}{41}$ 上

△D 113	B 112	B 111	B 110	A 109	A 108	A 107	D 106	B 105	A 104	A 103	A 102	B 101
獨 ^リ 吊 ^テ ニ形影 [○] ニ涙 [○] 沾 ^ス 巾 ^ヅ	阜 [×] 頭 [×] ニ充 [×] 滿 ^シ	阜 [×] 頭 [×] ニ來 ^リ	阜 [×] 頭 [×] ニ至 ^リ	既 ^ニ 骨 ^ニ 入 [○] ル	大計ヲ遺 ^レ 。	楚囚ノ辱ヲ受 [○] ケ	黒人數千ヲ驅 ^リ	法庭ニ論辨 [×] シテ	使ヲ遣 [○] シテ	此島 [○] ニ下 ^ス	東 [×] 山 [×] 黨 [×] 老 [×] 、 亞 [×] 智 [×] 勇 [×] <small>サントローアチナル</small>	輕 [×] 舉 [×] 暴 [×] 動 ^ノ 跡
$6\frac{8}{20表}$	$6\frac{2}{18表}$	$6\frac{9}{17裏}$	$6\frac{5}{17裏}$	$6\frac{7}{17裏}$	$6\frac{4}{14表}$	$6\frac{6}{12表}$	$6\frac{8}{11表}$	$6\frac{1}{10裏}$	$6\frac{10}{9裏}$	$6\frac{6}{7裏}$	$6\frac{1}{6表}$	$6\frac{8}{2裏}$
響 [×]	岸 [△] 上 [△]	河 [△] 邊 [△]	瀛 [△] 船 [△]	人 [×]	遺 [×] (排 [×] 錯 [×] 一 [×] 行 [×])	受 [○]	千 [○]	辯 [×]	遣 [×]	嶋 [○]	黨 [○] 老 [○]	暴 [×]
$\frac{4}{1110}$	$\frac{9}{1108}$	$\frac{8}{1108}$	$\frac{7}{1108}$	$\frac{5}{1108}$	$\frac{6}{1106}$	$\frac{5}{1105}$	$\frac{13}{1046}$	$\frac{8}{1046}$	$\frac{3}{1046}$	$\frac{1}{1045}$	$\frac{1}{1044}$	$\frac{3}{1042}$
影 [○]	阜 [×]	阜 [×]	阜 [×]	入 [○]	し [×] (れ)	愛 [×]	千 [○]	辯 [○]	遣 [○]	鳥 [×]	黨 [×] 老 [×] 、 、 [×] 、 [×] 、 [×]	暴 [×]
$\frac{7}{85上}$	$\frac{11}{84上}$	$\frac{9}{84上}$	$\frac{6}{84上}$	$\frac{21}{83下}$	$\frac{11}{82下}$	$\frac{1}{82上}$	$\frac{8}{81下}$	$\frac{16}{81上}$	$\frac{7}{81上}$	$\frac{15}{80上}$	$\frac{7}{79下}$	$\frac{21}{78上}$
影 [○]	埠 [◎]	埠 [◎]	埠 [◎]	入 [○]	遣 [○]	受 [○]	萬 [×]	辯 [○]	遣 [○]	島 [○]	特 [○] 羅 [○]	暴 [×]
$\frac{15}{182}$	$\frac{2}{181}$	$\frac{1}{181}$	$\frac{12}{180}$	$\frac{3}{180}$	$\frac{15}{177}$	$\frac{10}{176}$	$\frac{15}{175}$	$\frac{7}{175}$	$\frac{2}{175}$	$\frac{6}{172}$	$\frac{3}{171}$	$\frac{3}{168}$
影 [○]	阜 [×]	阜 [×]	阜 [×]	入 [○]	レ [○]	受 [○]	千 [○]	辯 [×]	遣 [○]	島 [○]	黨 [×] 老 [○] 、 、 [○] 、 [○] 、 [○]	暴 [×]
$\frac{1}{61下}$	$\frac{22}{60下}$	$\frac{20}{60下}$	$\frac{17}{60下}$	$\frac{12}{60下}$	$\frac{24}{59下}$	$\frac{26}{59上}$	$\frac{9}{59上}$	$\frac{21}{58下}$	$\frac{13}{58下}$	$\frac{13}{58上}$	$\frac{18}{57下}$	$\frac{21}{56下}$

A 126	A 125	A 124	B 123	A 122	A 121	A 120	D 119	B 118	A 117	A 116	△B 115	△A 114
妾力裾ヲ取リ	官職ニ入ルモノ	徒ニ使役セラル、	一言ノ辨明ヲ	其二十回ハ	躊躇罪ヲ得ル勿レ	而シテ決斷スルニ	人生ノ生死ニ	草廬ニ枉ケテ	險ハ崢嶸ヲ	長鯨ヲ屠ル	枉把ニ哀琴ヲ嘯皓月ニ	共誓微軀爲レ國捐
7 $\frac{1}{7}$ 表	6 $\frac{3}{36}$ 裏	6 $\frac{1}{35}$ 裏	6 $\frac{10}{32}$ 表	6 $\frac{3}{28}$ 表	6 $\frac{2}{27}$ 表	6 $\frac{6}{23}$ 裏	6 $\frac{7}{22}$ 表	6 $\frac{2}{21}$ 裏	6 $\frac{4}{21}$ 表	6 $\frac{3}{21}$ 表	6 $\frac{10}{20}$ 裏	6 $\frac{1}{20}$ 裏
孰×	人×	使。	辯×	二× 十× 四×	(省略)	(省略)	身×	枉。	榮×	鯨屠。	枉◎	軀。
7 1318	13 1243	5 1243	8 1179	12 1176	4 1176	5 1174	10 1173	4 1173	1 1173	1 1173	12 1110	6 1110
取。	入。	便。	辯。	二。 十。 回。	躊躇。	面×	生。	枉×	嶸。	鯨屠。	枉×	驅×
22 76上	15 91上	20 90下	14 89下	7 88上	10 87下	22 86上	19 85下	7 85下	21 85上	21 85上	18 85上	9 85上
曳。	入。	使。	辯。	廿。 回。	躊躇×	而。	生。	枉。	嶸。	鯨屠。	枉×	軀。
9 211	15 196	4 196	4 194	13 189	2 189	3 186	3 185	15 183	11 183	11 183	9 183	2 183
取。	入。	使。	辨×	二。 十。 回。	躊躇。	而。	生。	枉*×	嶸。	鯨屠。	枉×	軀。
19 69下	23 65上	9 65上	25 64上	24 63上	8 63上	21 62上	2 62上	20 61下	14 61下	14 61下	11 61下	3 61下

A 139	A 138	A 137	A 136	A 135	B 134	○C 133	A 132	○C 131	B 130	A 129	A 128	B 127
吉報ヲ祝セシ [×]	凄。然懷ヲ傷メ	左指。ノ金環ヲ	幽。將軍大ニ喜ヒ	幽將。軍カ一朝	狐。疑ヨリ過クル	百戰百勝ハ：（錯三字）	大功ヲ奏セシ	敗軍ノ將ハ：（錯三字）	誤謬ヲ辨ス [×]	老奴ヲ目スルニ	天上。自由ノ郷	二人亦潛然 [×]
$8\frac{7}{2\text{裏}}$	$7\frac{8}{34\text{表}}$	$7\frac{8}{32\text{裏}}$	$7\frac{1}{32\text{表}}$	$7\frac{10}{28\text{裏}}$	$7\frac{4}{28\text{裏}}$	$7\frac{6}{23\text{裏}}$	$7\frac{10}{22\text{表}}$	$7\frac{5}{16\text{裏}}$	$7\frac{3}{15\text{裏}}$	$7\frac{6}{15\text{表}}$	$7\frac{8}{8\text{表}}$	$7\frac{5}{8\text{表}}$
祝。	凄。	左指。	幽。	將。	狐。	（錯八字）	奏。	（錯四字）	辨 [×]	目。	上。	潛。
$\frac{2}{1454}$	$\frac{3}{1450}$	$\frac{5}{1449}$	$\frac{12}{1448}$	$\frac{4}{1447}$	$\frac{1}{1447}$	$\frac{3}{1386}$	$\frac{6}{1385}$	$\frac{1}{1382}$	$\frac{5}{1381}$	$\frac{3}{1381}$	$\frac{7}{1319}$	$\frac{13}{1318}$
ん。	准 [×]	左語指 [×]	蘭 [×]	幽 [×]	孤 [×]	（同博文堂）	奉 [×]	（同博文堂）	辯。	目。	下 [×]	潛 [×]
$\frac{13}{109\text{上}}$	$\frac{4}{107\text{上}}$	$\frac{22}{106\text{上}}$	$\frac{8}{106\text{上}}$	$\frac{21}{104\text{下}}$	$\frac{16}{104\text{下}}$	$\frac{21}{102\text{下}}$	$\frac{21}{102\text{上}}$	$\frac{11}{100\text{上}}$	$\frac{15}{99\text{下}}$	$\frac{8}{99\text{下}}$	$\frac{10}{97\text{下}}$	$\frac{21}{96\text{下}}$
祝。	凄。	指△	幽。	將。	狐。	（錯十六字）	奏。	（錯三字）	辯。	自 [×]	上。	潛。
$\frac{2}{240}$	$\frac{5}{234}$	$\frac{11}{232}$	$\frac{3}{232}$	$\frac{8}{229}$	$\frac{5}{229}$	$\frac{6}{225}$	$\frac{14}{223}$	$\frac{6}{219}$	$\frac{10}{218}$	$\frac{6}{218}$	$\frac{12}{212}$	$\frac{6}{212}$
ン。	凄。	左指。	幽 。	將。	孤 [×]	（同博文堂）	奏。	（同博文堂）	辨 [×]	目。	上。	潛 [。]
$\frac{12}{78\text{下}}$	$\frac{15}{76\text{下}}$	$\frac{22}{76\text{上}}$	$\frac{11}{76\text{上}}$	$\frac{26}{75\text{上}}$	$\frac{22}{75\text{上}}$	$\frac{3}{74\text{上}}$	$\frac{13}{73\text{下}}$	$\frac{11}{72\text{上}}$	$\frac{24}{71\text{下}}$	$\frac{19}{71\text{下}}$	$\frac{16}{70\text{上}}$	$\frac{8}{70\text{上}}$

ΔD 152	ΔD 151	ΔA 150	ΔA 149	ΔD 148	$\Delta D A$ 147	ΔB 146	D 145	ΔA 144	B 143	$\circ B$ 142	$\circ C$ 141	A 140
角弓 [○] 無 ^レ 由張 ^{ルニ}	力政 [○] 吞 ^ミ 九鼎 ^一	城闕 [○] 亦丘荒	墳 [○] 墓亂 ^レ 衰草 ^一	故山 [△] 夢一場	勿 [○] 問 ^レ 故山 [△] 事	心 [×] 丹 [×] ヲ吐露 ^シ	蟋蟀啼 ^キ 郊野 ^ニ	放 ^レ 舟自由郷	卽 [×] 天聖帝ト號 ^シ	唐ノ卽 [×] 天武氏ハ	霜葉紅 ^レ 如 ^キ 三二月花 ^一	年既 ^ニ 五十二 ^〇
$8 \frac{10}{11 \text{表}}$	$8 \frac{9}{11 \text{表}}$	$8 \frac{9}{11 \text{表}}$	$8 \frac{9}{11 \text{表}}$	$8 \frac{8}{11 \text{表}}$	$8 \frac{8}{11 \text{表}}$	$8 \frac{4}{11 \text{表}}$	$8 \frac{1}{10 \text{裏}}$	$8 \frac{10}{10 \text{表}}$	$8 \frac{9}{8 \text{裏}}$	$8 \frac{4}{8 \text{裏}}$	$8 \frac{10}{8 \text{表}}$	$8 \frac{7}{5 \text{裏}}$
弓 [○]	征 [△]	闕 [○]	墳 [○]	郷 [◎]	勿 [○] 郷 [◎]	丹 [△] 心 [△] (心膽)	鳴 [◎]	舟 [○]	卽 [×] 號 [×]	則 [○]	如 [×]	五 [×] 十 [×]
$\frac{1}{1583}$	$\frac{1}{1583}$	$\frac{13}{1582}$	$\frac{13}{1582}$	$\frac{13}{1582}$	$\frac{13}{1582}$	$\frac{11}{1582}$	$\frac{4}{1582}$	$\frac{4}{1582}$	$\frac{5}{1581}$	$\frac{3}{1581}$	$\frac{1}{1581}$	$\frac{10}{1579}$
弓 [○]	政 [△]	闕 [○]	墳 [○]	山 [△]	勿 [○] 山 [△]	心 [×] 丹 [×]	啼 [△]	舟 [○]	卽 [×]	卽 [×]	於 [◎]	五 [○] 十 [○] 二 [○]
$\frac{10}{112 \text{下}}$	$\frac{9}{112 \text{下}}$	$\frac{9}{112 \text{下}}$	$\frac{9}{112 \text{下}}$	$\frac{8}{112 \text{下}}$	$\frac{8}{112 \text{下}}$	$\frac{5}{112 \text{下}}$	$\frac{15}{112 \text{上}}$	$\frac{14}{112 \text{上}}$	$\frac{9}{111 \text{下}}$	$\frac{5}{111 \text{下}}$	$\frac{1}{111 \text{下}}$	$\frac{22}{110 \text{上}}$
功 [×]	政 [△]	關 [×]	憤 [×]	山 [△]	忽 [×] 山 [△]	心 [×] 丹 [×]	啼 [△]	舟 [×]	則 [◎]	則 [○]	如 [×]	五 [○] 十 [○] 二 [○]
$\frac{9}{246}$	$\frac{8}{246}$	$\frac{8}{246}$	$\frac{7}{246}$	$\frac{7}{246}$	$\frac{7}{246}$	$\frac{5}{246}$	$\frac{11}{245}$	$\frac{11}{245}$	$\frac{1}{245}$	$\frac{14}{244}$	$\frac{11}{244}$	$\frac{15}{242}$
弓 [○]	政 [△]	闕 [○]	墳 [○]	山 [△]	勿 [○] 山 [△]	心 [×] 丹 [×]	啼 [△]	舟 [○]	卽 [×]	卽 ×	如 [×]	五 [○] 十 [○] 二 [○]
$\frac{19}{80 \text{下}}$	$\frac{18}{80 \text{上}}$	$\frac{18}{80 \text{下}}$	$\frac{17}{80 \text{下}}$	$\frac{17}{80 \text{下}}$	$\frac{17}{80 \text{下}}$	$\frac{14}{80 \text{下}}$	$\frac{4}{80 \text{下}}$	$\frac{4}{80 \text{下}}$	$\frac{11}{80 \text{上}}$	$\frac{7}{80 \text{上}}$	$\frac{4}{80 \text{上}}$	$\frac{25}{79 \text{上}}$

A 166	B 165	A 164	B 163	B 162	B 161	A 160	A 159	A 158	B 157	A 156	A 155	A 154	A 153
之ヲ望メハ。	内閣ノ交迭	癡雲光ヲ掩テ	星客ヲシテ	輕跳ニシテ	俄國辨士ノ遊説	維也納鎮臺ニ令シテ	幾十萬ナルヲ	今ノ大臣ヲ外ニ	鐵推民ヲ御スル	探偵費ト稱シ	萬性ノ腹中ニ	大義ヲ述ヘ	自國ト異ナリ
$\frac{1}{12}$ 表	$\frac{7}{12}$ 裏	$\frac{4}{7}$ 裏	$\frac{1}{11}$ 裏	$\frac{1}{23}$ 裏	$\frac{8}{41}$ 裏	$\frac{8}{38}$ 裏	$\frac{8}{34}$ 裏	$\frac{8}{31}$ 裏	$\frac{8}{31}$ 裏	$\frac{8}{21}$ 裏	$\frac{8}{15}$ 裏	$\frac{8}{12}$ 裏	$\frac{8}{12}$ 裏
望。	更◎ 易◎	掩。	客◎ 星◎	佻。	辨×	(排錯一行)	千×	大。	(省略)	探偵費。	姓。	(省略)	已×
$\frac{5}{60}$	$\frac{11}{1321}$	$\frac{3}{700}$	$\frac{4}{60}$	$\frac{13}{126}$	$\frac{12}{1720}$	$\frac{8}{1718}$	$\frac{4}{1716}$	$\frac{7}{1662}$	$\frac{6}{1662}$	$\frac{2}{1657}$	$\frac{7}{1585}$	$\frac{1}{1584}$	$\frac{8}{1583}$
望は×	交×	掩。	星客×	跳×	辯◎	令。	十。	大。	推×	探偵費。	性×	逃×	自×
$\frac{22}{8}$ 下	$\frac{12}{98}$ 下	$\frac{21}{50}$ 下	$\frac{17}{8}$ 下	$\frac{7}{13}$ 上	$\frac{18}{124}$ 上	$\frac{2}{123}$ 上	$\frac{3}{121}$ 下	$\frac{20}{120}$ 上	$\frac{15}{120}$ 上	$\frac{10}{116}$ 下	$\frac{13}{114}$ 上	$\frac{13}{113}$ 上	$\frac{22}{112}$ 下
望。	交×	掩。	星客×	佻。	(省略)	令。	十。	人×	椎。	偵以探費×	姓。	述。	自。
$\frac{3}{12}$	$\frac{3}{216}$	$\frac{2}{108}$	$\frac{1}{12}$	$\frac{13}{21}$	$\frac{14}{272}$	$\frac{14}{269}$	$\frac{10}{266}$	$\frac{15}{263}$	$\frac{12}{263}$	$\frac{1}{256}$	$\frac{13}{250}$	$\frac{11}{248}$	$\frac{6}{247}$
メ。バ。	交×	掩。	星客×	佻。	辨×	合×	十。	大。	椎。	探偵費。	性×	述。	自。
$\frac{4}{7}$ 下	$\frac{14}{71}$ 上	$\frac{1}{36}$ 下	$\frac{1}{7}$ 下	$\frac{16}{10}$ 上	$\frac{28}{88}$ 上	$\frac{6}{87}$ 下	$\frac{11}{86}$ 下	$\frac{27}{85}$ 下	$\frac{23}{85}$ 下	$\frac{28}{83}$ 上	$\frac{27}{81}$ 下	$\frac{10}{81}$ 上	$\frac{28}{80}$ 下

(Aは誤植。Bは当て字。Cは出典に合わない。Dは改訂。○は出典あり。△は漢詩文)

各本の正誤表

本名	個所	誤「×」	誤比率	亦可「△」	正「○」	独正「◎」	正比率
博文堂	一九〇	六四	三三、六八%	七	一一八	一	六二、六三%
清議報	一八九	八一	四三、八六%	一七	七二	一九	四八、一五%
春陽堂	一九〇	一〇四	五四、七四%	七	七五	四	四一、五八%
上海本	一八八	五〇	二六、六〇%	一三	一一七	八	六六、四九%
筑摩本	一九〇	五五	二八、九五%	七	一二八		六七、三七%

右に掲げた正誤率表は、その前に掲げた原著三本・訳本二本に見られる文字の異同に基づいたものである。これに依ると、誤り個所の比率が一番少ないのが「上海本」、一番多いのが「春陽堂」本である。

昭和四十二年に出版された「筑摩本」にまだ五十五個所も誤りがあることは誠に残念であり、一本のみの正しい個所、つまり他本を訂正した個所は、「清議報」が一番多く、その次が「上海本」であり、これにこの二本のみが正しい個所35の「駘蕩」・42の「干紀」・54の「朝廷」・64の「東隅」・65の「桑榆」・74の「慘澹」・75の「征衫」・118の「枉」・142の「則天武氏」・155の「萬姓」等の十個所を加えると、訳本のみが正しい個所は三十七個所にもなり、訳本が逆に原著の誤植・当て字及び不適当な語彙を訂正していると言う奇妙な現象は注意に値いすると思う。

次に二三氣が付いたことを述べると、植字工による誤植と思われる

A 八十三条のうち、「春陽堂」が一番多く、四十一条も誤植があり、その次が「清議報」の三十六条、三番目が「上海本」の十六条。「博文堂本」は21の「于[×]シ」・164の「掩[×]テ」・138の「祝[×]セシ」の三条だけ、一番最後にできた「筑摩本」が160の「合[×]シテ」一条だけである。清議報の誤植は108・160の如く一行そっくり排列を誤った個所もあり、ずさんなところがあるが、しかし不備な条件の下で創刊された旬刊誌のことであるから止むを得ない事情もあると思われるが、昭和五年に出版された明治大正文学全集の「春陽堂本」に一番誤植が多いということ、譏りを免れることはできないだろう。

著者や訳者の不注意による当て字と思われるB 四十五条のうち、「博文堂本」が一番多く三十九条、「春陽堂本」がその次の三十六条、三番が「筑摩本」の三十四条。四番目が「清議報」の十四条、「上海本」は十条で一番少ない。原著三本が揃って訳本二本よりも倍以上も

当て字が多いことは興味深いことである。

当て字の内容について言うと、146の「心丹」に対しどの本も誤りを訂正しておらず、ただ梁訳本だけが「心丹」（心膽）では意味が通らないので、「丹心」に直している。30の「萃ニ」に対しても、梁訳本は「萃」では意味が通らないので、的確に「遂」の字に改めている。「筑摩本」は無理矢理に「萃」と読み仮名を付けたのは可笑しい。

「萃」は卒の間違いである。163の「星客」と165の「交迭」に対しても、梁訳本だけが「客星」と「更易」に訂正して意味が通るようしている。

「辯」字を間違えて「辨」字を当てた箇所が八箇所もあり、このうち「博文堂本」と「筑摩本」は八箇所とも当て字を使い、「春陽堂本」だけが全部「辯」字に訂正しており、梁訳本は一個所だけ訂正し、「上海本」は一個所だけ間違えている。このことから訳本はそれ程当て字訂正に努めているとは思えない。このことは、98の「輕舉暴動」を梁訳本は「輕舉妄動」と訂正しておきながら、101ではそのまま「輕舉暴動」と当て字を使い、上海本は「枉」三個所あるうち、118だけを「枉」と訂正したことからも言えるでしょう。

当て字は全部で二十九字使われており、このうち梁訳本が単独で八字訂正し、上海本が単独で四字訂正し、二本共同で訂正したのが六字である。42の「于紀」は、明治政治小説研究の権威者である柳田泉氏でさえ、

范卿の談話中、明清の歴史知識を要するところがあり、他にも于紀などという人名も見えるが、これは于氏、紀氏で明の大臣大將

の姓と思えばよい。⁹⁷⁾
と人の名字に誤解したぐらいであるから、あながち疎かにはできないのである。

Cは出典がある語句である。異同があるのが全部で十九条、このうち「博文堂本」が完全に出典と合致しているのは、6・16・78の三条だけ、「春陽堂本」と「筑摩本」が合致している20と「春陽堂本」だけが合致している14を加えても五条だけで、原著が如何に出典の文面に一致することに気を取られていないことが分かつと思う。一方、訳本の方も、梁訳本では33・36の二条だけ、上海本は6・7・64の三条だけである。これは小説は研究論文と異なり、引用文は必ずしも出典と一字違わずに引用するとは限らないためでしょう。

それにしても、明史に出て来る明末抗清の將軍「焦璉」を28で「鼎璉」と引用し、「何騰蛟」を29で「何蛟騰」と引用し、皆がよく知っている杜牧の「山行」詩「霜葉紅於二月花」の句を14で「霜葉紅如二月花」と引用し、史記、淮陰侯伝の「敗軍之將、不可以言勇。亡國之大夫、不可以圖存。」（敗軍の將は以て勇を言ふ可からず。亡國の大夫は以て存を圖る可からず。）を131で「敗軍ノ將ハ以テ勇ヲ語ル可カラズ、亡國ノ大夫ハ共ニ存ヲ謀ル可カラスト」と引用するのは、どうかと思う。

訳者が改訂を行なったと思われるのがD二十二条である。このうち日本文に改訂を行なったのが五条だけで、残りは全部漢詩文である。つまり本来翻訳の必要がない漢詩文に対して改訂が行なわれたことに

なるから興味深い。「上海本」が改訂を行なったと思われるのは、たったの五条だけで、残り十七条は全部「梁訳本」が行なったのであるから、ここでも両本の翻訳の仕方の違いがはつきり出ていると思う。

「上海本」が39の「自由ノ里」の「里」を「郷」に改訂したのは中国語として分かり易くするためであり、57の「荆軻慕燕丹之義」の「義」を「意」に、152の「角弓無由張」の「弓」を「功」に改訂したのは、音が近似しているための間違いと思う。106の「黑人數千ヲ驅リ」の「千」を「萬」に改訂したのは、原著よりも誇張し過ぎて感心できない。75の「中泉寂トシテ夜沈沈」の「中」を「九」に改訂したのは、「中泉」は新の王莽の作った銭名の意味で、ここでは意味が通らないので「九泉」に改正したものと思う。

一方、梁訳本の方は、44の「自主刀鋒正犀利」の「主」を「立」に改め、69の「好除獨夫興新政」の「獨」を「鄙」に改めたのは、民族主義革命派と異なり、保皇維新派にある立場上そのように改訂したものと思われる。50の「窓暗月色青」の「青」を「清」に改めたのは、「月色青」という言い方は中国語としてなじみないからであり、58の「雖微達節、謂之可庶」を「雖非達節、其庶幾乎」に改めたのは、その方が通順であるからであり、81の「滿目晝暗草苑苑」の「暗」を「陰」に改めたのは、「晝暗」という言い方が少ないからであり、145の「蟋蟀啼郊野」の「啼」を「鳴」に改めたのは、中国語では「啼」は鳥獸が鳴くの用に、昆虫が鳴く場合は大抵「鳴」を用いるからである。佩文韻譜にも「蟋蟀」に対しては、「蟋蟀鳴・蟋蟀吟・蟀蟀唱」

の用例があるだけである。147の「勿問故山事」と148の「故山夢一場」の「山」を「郷」に改めたのは、「故郷」は一般的な言い方で分かり易いからである。王維の「雜詩」にも「君自故郷來、應知故郷事」という用例があるように、「故郷事」の方が平易な言い方でよいと思う。56の「昔聶政殉嚴遂之顧」の「顧」を「難」に改めたのは、その方が分かり易いからである。「顧」一字だけでは、すぐに「愛顧・眷顧」の意味には取れないし、「殉顧」という言い方もない。以上述べた訳者による改訂は、いずれも原著よりも明快・適正であると思う。100の「大西洋」を「太平洋」に、119の「人生」を「人身」に改めたのは、何かの間違いに依るものと思う。その他の改訂は訳者の好みに依るものと思われ、必ずしも原著より秀れているとは思えない。いずれにせよ、清議報の方が上海本よりも多く原著の漢詩文に手を加え、改正したということは、清議報の大きな特徴の一つである。

四

以上訳本二本を比較論考して分かったことは、以前私が原著に優る名訳と指摘した箇所は、梁訳本より三十七年遅れて訳した上海本に較べても、やはりそのほとんどが上海本の訳よりも勝れており、梁啓超の文才のすばらしさは、この両本の比較によって一層はつきりしたものである。誤植・当て字及び不適当語彙の比率は、草創と環境不備のため、梁訳本の方が上海本よりもずっと多いが、しかし、その原著を改正した箇所は上海本の倍もあり、これは梁訳本が原著に忠実になる

が余りに、中国文としての明快さを損うことを避けた翻訳姿勢の現れであると思う。

梁啓超が未だ日本語を学んでいない時点において訳した清議報の「佳人之奇遇」には、当然誤訳した個所が沢山あるが、しかし、その名訳及び誤植・当て字・不適当語彙訂正と思われる個所においては、依然として後来のものに引けを取らずにおるということは、梁啓超の文学を知る上においてのみならず、日中文学交流の上においても注意に値いするものであると思う。(一九七七・八・一八)

註1：世界書局、丁文江編「梁任公先生年譜初稿」第八〇頁。

註2：清議報第六十九冊「本館告白」欄に、「経国美談」をかく称しているので、それ以前に訳載した「佳人之奇遇」はなおさらのこと。

註3：国際文化振興会、実藤惠秀編「中譯日文書目録」第一三頁。

註4：春秋社、柳田泉著「明治文学研究」第八卷「政治小説研究上」第三八一頁。

註5：(1)東京教育大漢文学会報30、拙稿「清議報登載の佳人之奇遇について——特にその訳者」。 (2)斯文66号、拙稿同題「特にその名訳と誤植訂正」。

(3)斯文67号、75・76合刊号、78号、拙稿同題「特にその誤訳」。 (4)斯文68号、大正大学研究紀要61、専修人文論集16、拙稿同題「特にその西洋的外来語」。 (5)大正大学研究紀要57、拙稿同題「特にその改削」。

註6：同註5の(2)。

註7：筑摩書房「明治文学全集6」第四八四頁。柳田泉「解題」。